

ハノイ紀行, 変わりいく紅河デルタ（特別紀行）

江頭, 和彦
九州大学大学院農学研究院

<https://doi.org/10.15017/4375>

出版情報：九州大学大学院農学研究院学芸雑誌. 60 (2), pp. 359-393, 2005-10-01. 九州大学大学院農学
研究院
バージョン：
権利関係：



特別紀行

ハノイ紀行, 変わりいく紅河デルタ

江 頭 和 彦*

九州大学大学院農学研究院植物資源科学部門植物生産科学講座土壌学研究室
(2005年6月30日受付, 2005年7月26日受理)

Field-Survey of Sub-Rural Areas in the Red River Delta
Developing Quickly in Recent Years

Kazuhiko EGASHIRA*

Laboratory of Soil Science, Division of Soil Science and Plant Production,
Department of Plant Resources, Faculty of Agriculture,
Kyushu University, Fukuoka 812-8581, Japan

2004年10月28日～11月4日の日程で、バングラデシュ農業大学との学術交流協定調印のために、3年半振りにバングラデシュ国を訪問した後、韓国大田広域市に在る忠南大学校農業生命科学大学で開催された韓日四大学合同シンポジウム “International Joint Symposium between Korea and Japan: The recent status and perspectives of agricultural environment and biotechnology” に参加するために、11月9日～12日の日程で韓国を訪問し、12月23日から26日まで、中国農業科学院農業資源与農業区画研究所との学術交流協定及び学生交流に関する覚書調印並びに九州大学中国同窓会設立総会出席で、中国北京市を訪問した。「アジア指向」を国際協力の一つの旗印として推進する大学院農学研究院において、研究院長としての2年間(2003年4月～2005年3月)に、合わせて7回アジア諸国を訪問した(内訳:韓国, 1回;中国, 3回;越南, 2回;バングラデシュ, 1回)。7回のうち3回は学術交流協定等の調印(上記二つの機関の他は中国科学院水利部水土保持研究所)のためであり、3回は日越(ハノイ農業大学, 2003年11月), 日中(烟台大学, 2004年9月), 日韓の合同シンポジウム/ワークショップ開催に伴うものである。最後の1回が、本特別紀行で記述する、越南ハノイ及びハノイ農業大学訪問である。ハノイ農業大学(Hanoi Agricultural University: HAU)へは、1998年9月から2003年8月

までの5年間、九州大学大学院農学研究院と熱帯農学研究センターが中心となり、山口・佐賀・宮崎・鹿児島・琉球の各大学農学部とコンソシアムを形成して、JICA技術協力プロジェクト「ハノイ農業大学強化計画」による教育研究支援が実施され(江頭・緒方, 2000; 国際協力事業団農業開発協力部, 2003), それを補完する形で、九州大学P&P(教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト)「農学分野における研究パートナーシップの構築」(期間: 2003～2005年度; 代表: 江頭和彦)が実行されている。

今回のハノイ訪問の日程は2005年3月13日から20日までで、12日の平成17年度個別学力検査(後期日程)を済ませて翌日出国し、帰国後すぐに福岡県西方沖地震に遭遇した。同行は黒澤靖さん(九州大学熱帯農学研究センター)と久保研一さん(熊本県農業研究センター)の二人で、久保研一さんは農学部農芸化学科の卒業生である。ハノイ及びハノイ農業大学訪問の目的は、1)九州大学P&P「農学分野における研究パートナーシップの構築」の研究成果発表として、2005年12月に予定しているハノイ農業大学土地資源環境学部及び農学部との合同シンポジウム開催に向けての打ち合わせ、2)私が指導中の留学生の勤務先である国立土壌肥料研究所(農業農村開発省)の訪問、3)現在ハノイ周辺の3社(コミュニケーション)でモニタリングを継続している水質調査の展開を図ること、である。訪問の

*Corresponding author (E-mail: kegashi@agr.kyushu-u.ac.jp)

目的を果たして充実したハノイ紀行となり、変わりいく紅河デルタを目で見て、肌で感じた1週間であった。

福岡空港で

2005年3月13日(日)、8時15分過ぎに家を出る。寒波襲来で真冬並みの気温。強い北風が吹き時折小雪が舞う中を、スーツケースを引っ張りながら、西鉄宮地岳線三苦駅まで歩く。駅舎の直前で電車が出る音を聞き、次の電車まで10分程待つ。貝塚駅で市営地下鉄に乗り換え、福岡空港で空港連絡バスに乗り、国際線ターミナルビルに向かう。集合予定時刻の10時少し前に、3階の出発ロビーに着く。同行の黒澤靖さんと久保研一さんは既に来て待っており、互いを紹介する。荷物検査の時ひと悶着起こる。黒澤さんが携行していたpH標準液のボトル2本が、販売した薬品会社の証明書が付いていないという理由で、空港側で処分するか着払いで返送するかを選択を迫られる。薬品販売会社の証明書の添付は、2003年3月の米英によるイラク攻撃の時から義務付けられたとのことで、このことは一般には知らされていないとの、応じた空港係官の説明。少し抵抗してみたが、所詮は無謀なこと。手荷物のボールペンケースに小さなドライバーを入れていてやや心配したが、その後の手荷物検査は無事通り抜ける。搭乗手続きを済ませて博多通りもん4個を買い、出国審査後焼酎3本を買う。久保さんに頼んでおいた誉の陣太鼓4個と合わせ、土産は揃う。締めて13,740円、3人ではほぼ等分に負担する。どの国を訪問してもそうだが、越南訪問には特に土産に気を遣う。搭乗待合室に到着き、機内に入り込む前缶ビールで乾杯してささやかな結団式。

ハノイへ

ハノイへはバンコク経由で行く。バンコク行きTG649便は、このところ熱帯アジアへ行く時の常用の便で、JL5119便との共同運航便。離陸前の機内安全案内(safety demonstration)はタイ語と英語で行われ、モニターテレビの画面に日本語が付記される。TG649は定刻の12時ちょうどに動き出し、バンコクまでの飛行時間は5時間50分との機内放送。この時期の強い偏西風を予想する。機体は、アジアへの紀行で度々乗ってきた、エコノミークラスは2列-4列-2列のエアバスA300-600。全席禁煙で、座席は真中4列の右端。12時7分に離陸し、すぐにシートベルト着用のサインが消える。TG(タイ)とJAL(日本)の共同運航便ながら、機内放送はタイ語、英語、日本語の順になさ

れる。座席を右2列の窓側(48K)に移動する。飛行機は九州上空を飛ぶ。雲は多いながら、眼下の地形、土地利用は見える。東シナ海-台湾台北-南シナ海-越南ダナン-ラオス上空を通り、バンコク午後3時55分着、バンコクは曇り、地上温度34℃との機内放送。福岡とは30℃近い温度差である。鹿児島上空から12時30分頃までには東シナ海に出る。海上に出て一面の雲、薄いすじ状の雲とやや厚い雲。雲の形は変幻自在、千切れた雲が点々と浮かぶ。雲の切れ間に海面がのぞき、そこかしこに白い波頭が見える。溯って、12時20分からタイ航空自慢のRoyal Orchidサービスの始まり。最初は海苔付き煎餅(seaweed rice crackers)、おつまみとして出されたが、バッグにしまう。結局これは日本まで持ち帰り、3月20日福岡県西方沖地震発生後の食堂が閉まった中での貴重な昼食となった。

海苔付き煎餅に続いて白ワイン。やや間を置いて、13時6分に機内食が配られる。メインはご飯とビーフカレー。カレーは甘口で、インゲンマメとニンジンが添えられる。それに前菜(ゴボウの煮付け、豆と鮭)と、果物とデザートが付く。パンとバターも配られる。コーヒー、紅茶もあるが、最後はやはり日本茶(緑茶)。日本茶まで飲み終えて13時28分。更にもう一杯日本茶を飲み、全て終えたのは13時42分であった。14時下は相変わらずの白い雲、白い綿雲が一面に浮かぶ。腕時計の針を2時間遅らせて12時に戻し、タイ時間に合わせる。トイレから戻り、日頃の疲れと、乗る前のビールと機内でのワインの酔いが回り、窓のシャッターを下ろして仮眠に入る。12時半シャッターを少し上げて下を覗くと、厚い雲の絨緞。テレビのモニターでは台北を過ぎ、再び海上に出て少し経ったところ。午後1時窓外の雲は更に増え、厚みを増す。1時半依然雲ばかり。2時36分ちょうどインドシナ半島に入るとのモニター表示。しかし、下は全くの厚い雲。インドシナ半島を進むにつれて、雲の姿は厚い絨緞から薄いヴェール状に変わり、幾つもの垂直に立ち上がった形に移り変わる。3時熱いお絞りが配られる。同時に機内の照明が点けられ、TG649は着陸モードに入る。水とオレンジジュースのサービスでは水を選ぶ。雲は判然としないよんだ様になり、大小の垂直に盛り上がった雲がぼつかぼつかと浮いている姿になる。

結局メコン川も何も見えぬままタイ領空に入り、3時20分過ぎ飛行機は降下し始める。雲の大きな穴から、乾季の終わりの、乾燥して赤茶けたタイの大地が霞がかって見える。ドンムアン(Don Muang)空港近く、一戸建ての小さな住宅の集กลุ่มを幾つも見る。このよ

うな住宅集合群を見るのはここ数年のことであり、タイ都市部の住宅事情の変化を想う。そうこうしているうちに、3時52分バンコク、ドンムアン空港に着陸する。ターミナルビルに入り、出発階の中を端から端まで歩きながら、時々店を覗いて、蘭の花の入ったハート型のプラスチック製（ガラス製と思って買ったのがそうではなかった）の重しを一つ購入する。出発階を歩きながら椅子が少なくなっているのに気付く。そのため歩き回らざるを得ず、これも旅行者に色々を買わせようとする魂胆かなと、座れない不満からやや勘ぐる。

出発階の店の並ぶ通路を50分近く歩き回って、午後5時にハノイ行きTG684便の搭乗待合室ゲート14に入り、5時20分機内に入り込む。機体はA300-600。座席は38G、真中4列の右端。機内はほぼ満席。様々な国籍の顔が見え、現在の越南人気、ハノイの重要性がうかがわれる。TG684は5時50分に動き出し、同時にタイ語と英語による機内安全案内が始まる。機内安全案内を聞きながら、何度聞いてもその事態になれば絶対におおろするだろうと、その事態に会わないことをただただ祈るのみ。5時59分、太陽が沈みかけ、霞がかかるバンコクの空へ離陸する。6時4分シートベルト着用のサインが消え、6時16分機内食が配られる。メインはチキンカレーで、ご飯は長粒のインディカ米、温野菜が添えられる。前菜は生野菜数種、それにデザート。飲物はオレンジジュースと水、それに赤ワインを飲む。色々飲物を頼んでみるが、やはり水が一番である。最後はコーヒーにして、6時33分終了する。TG684は7時3分に下降し始め、7時22分にハノイ、ノイバイ（Noi Bai）国際空港に無事着陸する。こうして9回目のハノイ紀行が始まる。

ハノイホテル

着陸時雨は降っていなかったけれども、空港の路面には雨の跡が残る。後でハイさんの話では、午後5時半から1時間近くスコールがあったとのこと。ノイバイ空港では、ハイさん（Do Nguyen Hai）とハイ君（Nguyen Quang Hai）が出迎えてくれる。ハイさんが用意してくれた車で、8時にノイバイ空港を出る。ハイ君は乗り切れず、バスで彼の自宅まで帰ることになる。8時40分ハノイホテル（Hanoi hotel）に到着、ここは最近ハノイでの定宿になりつつある。ハノイホテルはザンヴォー（Giang Vo）湖に面し、湖景楼（Lake wing）と城景楼（City wing）の二棟がある。これまでは湖景楼の部屋ばかりだったが、今回は城景

楼の6階602号室。部屋に荷物を置いてすぐ、ハイさんの案内で、4人で山羊肉を食しに行く。この山羊肉レストランは私には2回目になる。前は2002年10月で、メンバーはハイさんと黒澤さん。メニューは前回と同じで、山羊肉の炭火焼と山羊鍋。山羊鍋には豆腐、からし菜、大豆の乾燥物が入る。熱々のそれらを頬張りながら、小さなグラスに越南焼酎を重ねる。

ハノイホテルに戻り、荷物を整理する。602号室の部屋の設備は次のようである。ツインのベッド、ベッドサイドテーブルには電話が載る。クローゼットと茶器の棚。荷物台と、机に椅子。机にはテレビが載り、冷蔵庫が備えられる。机上にはランプがあり、前に鏡。物書きには十分なスペースと照明である。窓側にテーブルと椅子2脚。テーブル上の果物籠にはバナナとマンゴーが置かれ、ミネラルウォーター1本とともにサービスされる。バナナは食べ、マンゴーは冷蔵庫に入れる。バスルームにはバスタブとシャワー、洗面台、便器があり、電話が付く。これだけの設備ながら、部屋にはティッシュペーパーが置かれてなく、靴べらも洋服ブラシも見当たらない。ハノイホテルの宿泊客には欧米系も見えるが、やはり中国人が最も多く、彼らが持ち帰るので置いていないのかもしれない。そう言いながら私も、マッチ、絵葉書、インスタント嗜好品を全て持ち帰った。ホテルの部屋代は朝食付きで1人1泊40USドル、それに税15%が加算されて46USドル。相応の値段と判断する。今日福岡ーバンコクーハノイと飛んで、福岡の最高気温は6℃、バンコクは機内放送で34℃、ハノイは機内放送が英語で判然としなかったが、黒澤さんの話では15～16℃。バンコクでは飛行機を降りてターミナルビルまでの通路はむっとする暑さを感じたが、ハノイの空港ではやや肌寒く感じるほどであった。

ハノイ農業大学へ

3月14日（月）、朝6時半に起床。さわやかな目覚めである。ハノイはどんよりとした曇り空。窓越しに見る外は寒そうである。バイクの人も、歩く人も、半袖の人は一人もいない。熱いシャワーを浴び、心身をリフレッシュする。点けたテレビのチャンネルでは、中国語の料理番組があっていた。台湾系の放送と思われる、コック（男）と女性のナビゲーターとのコンビで、デコレーションケーキを作っていた。料理番組終了後、ハノイの水上人形劇の案内。7時半に3人で揃い、朝食を取りに行く。湖景楼のレストラン緑波（Green wave）で、中華料理と西洋料理のバイキング。

質量ともに前回（2003年11月）と大差なく、寿司が消えていた。食事中の人々の間からは、日本語、中国語、フランス語が聞こえてくる。ハノイホテルの自分の部屋から見ると、またレストラン緑波から見えるところ、幾つもの高層建築物の建設が進む。ハノイは依然大改造中である。

8時50分にハイさんの迎えを受けてハノイホテルを出て、ハノイ農業大学へ向かう。その前、ホテルのフロントで両替する。1万JP円で140万VNドンがくる。前は120万VNドンで、前回より20万VNドンのドン安である。フロントのメンバーは、入れ替わりがかなり頻繁のような気がする。前回の時と、女性スタッフの顔に見覚えがない。還剣湖（Ho Hoan Kiem）の傍の銀行で黒澤さんが両替する間、車を降りて外へ出て待っていたが、上着を着ていても半袖のシャツでは寒く感じるほど。15℃前後ではないかと思う。ハイさんの話では、12日までは暑かったけれど、“North wind”の影響で13日から急に寒くなったとのこと。福岡の寒さをそのまま持ち込んだほどの寒さである。9時20分紅河に架かるチュオンズオン（Chuong Duong）橋に差し掛かる。上流のロンビエン（Long Bien）橋は、建設後103年を過ぎて依然健在である。紅河の水位が低い。今は乾季の終わりで、1年中で最も水位の低い時期にあるとはいえ、初めて見る低さである。ロンビエン橋との間に見る中洲が完全に浮き出ている。ハイさんの話では、河川の水位の低さのため、紅河デルタでは春稲への灌漑に支障が出ているとのこと。橋を越えてザーラム県（Gia Lam district）に入る。ザーラム県にあった料金徴収所、もう通行料を取らなくなったとのこと、建物は撤去されゲートだけが残る。9時28分ロータリーを右折してハノイハイフォン（Ha Noi-Hai Phong；河内-海防）道路に入り、9時35分ハノイ農業大学への取り付け道路の入口に着く。貨物列車の通過で数分待たされ、42分大学正門を通り、45分土地資源環境学部（Faculty of Land Resources and Environment）の建物の前に着く。土地資源環境学部は2002年に農学部の一部を取り込んで拡大し、同時に学部の名称を、それまでの土地・水資源管理学部（Faculty of Land and Water Resources Management）から現在の名称に変更した。

ハノイ農業大学での打ち合わせ

車を降りて建物2階の学部会議室に案内され、2005年12月に予定している合同シンポジウムの打ち合わせ

に入る。土地資源環境学部側の出席者は、グエン・ティ・ヴォン（Nguyen Thi Vong）学部長、グエン・スアン・タイン（Nguyen Xuan Thanh）副学部長、ドオ・グエン・ハイ（Do Nguyen Hai）学部国際担当、グエン・ヒュー・タイン（Nguyen Huu Thanh）学部中央実験室担当の4人。チャ（Ho Thi Lam Tra）は、我々が土地資源環境学部の建物の前に着いた時真っ先に出迎えてくれ、会議室まで付いて来て暫らく話をしたが、打ち合わせの直前に出て行く。各人の立場というか、学部内での厳格な序列・役割分担があるようである。渡越前P&Pメンバーとのメール会議を通して作成し、用意してきた合同シンポジウムの計画書を相手側に渡し、ハイさんの通訳を通して協議を進め、時々越語による彼ら同士の話し合いに任せながら、計画書の線で一応の合意に達する。今朝は越南の人々には本当に寒かったのであろう、迎えに出て来たチャは厚手のオーバーコートを着ていたし、ヴォン学部長は協議中首にマフラーを巻いたままであった。

12月の合同シンポジウムは、日本側はP&P「農学分野における研究パートナーシップの構築」のメンバー、ハノイ農業大学側は土地資源環境学部と農学部（Faculty of Agriculture）が対象学部である。ハノイ農業大学では学部間のセクショナリズムが強く、土地資源環境学部と農学部の規模の違いから、両学部の調整をどう図るかが、合同シンポジウムの成功に向けての最大の懸案事になりそうである。そのため、両学部の調整は、土地資源環境学部が主導権を取りながらの両学部の話し合いに任せることにして、土地資源環境学部に残っている農学部のグエン・ヴァン・ディン（Nguyen Van Dinh）学部長との打ち合わせでは、ハイさんが同席して、計画書は見せずに、土地資源環境学部との合意事項を口頭で伝えて協議を進める。その戦略が功を奏し、20分足らずの打ち合わせでディン学部長と合意に達する。プログラム等合同シンポジウムの詳細は、電子メールを通して、ハイさんと黒澤さんの間で詰めていくことになる。

12月の合同シンポジウム開催に向けて、合意事項の概要は次のようである。シンポジウムのテーマは「農学分野における研究パートナーシップの構築－農業生態系管理技術の確立に向けて－」（Development and Intensification of Research Partnership in Agricultural Sciences - Towards Establishment of Management Practices for Sustainable Agricultural Ecosystem-）である。シンポジウムの開催場所はハノイ農業大学、開催日を2005年12月8日と9日

とし、その前に4日間（行きと帰りを含め）のソンラ（Son La）省へのエキスカージョンを行う。8日はP&P生物資源グループと農学部、9日はP&P地水環境グループと土地資源環境学部の発表とし、二つのセクションを一体のものとして扱う。両日とも、基調講演を行い、口頭発表はハノイ農業大学側4人、九州大学側3人とする。その他、学生によるポスター発表を計画する。講演は、発表後、熱帯農学研究センター報告（Bulletin of the Institute of Tropical Agriculture, Kyushu University）の特別号として刊行する。

昼 食 会

ディン農学部長との打ち合わせを終えて、圃場を少し見て回る間、グエン・ヴァン・ズン（Nguyen Van Dung）さん（土地資源環境学部）とグエン・テ・フン（Nguyen The Hung）さん（農学部）に会う。二人とも、九州大学大学院農学研究科にあるいは熱帯農学研究センターでのカウンターパート研修の経験を持つ。ハノイ農業大学では、少し歩くとあちこちで知り合いに会う。12時近くになり、ハノイ農業大学構内のキム・タイン（Kim Thanh）食堂に向かい、そこで昼食を取る。食堂に入った所で、1階で食事をしていたファム・ゴック・トゥイ（Pham Ngoc Thuy）前土地・水資源管理学部長に会い、通りすがりに挨拶する。我々は2階に上る。昼食へは、ハノイ農業大学からハイさん、ヒュー・タイン（Nguyen Huu Thanh）さん、チャ、フイ（Trinh Quang Huy）の4人、それに運転手が加わる。運転手はグエン・ヴァン・トン（Nguyen Van Thong）と言い、その昔越南戦争の頃ホー・チ・ミンルートでトラックを運転していたと、黒澤さんから聞いていた。食事の時年齢を聞いたところ、51歳と言う。そうすると、十代から二十歳前後で運転していたことになる。なかなかの兵である。ハノイ農業大学の4人は、いずれも、大学院農学研究科/生物資源環境科学府の博士後期課程（国際開発研究特別コース）院生（チャ、フイ）として、あるいは「ハノイ農業大学強化計画」のカウンターパート研修生（ハイさん、ヒュー・タインさん）として、土壌学研究室（九州大学）に在籍した経験をもつ。これまでの例ならハイさんとヒュー・タインさんだけだが、それにチャとフイを加えてくれたことに、土地資源環境学部の粹な計らいと感謝する。気心の知れた者同士で、愉快的な昼食会となった。料理は鍋料理で、魚、肉、豆腐、それにたっぷりの野菜が加わりヘルシーである。最後は麺で、ビーフン（米）とミィ（小麦）があり、

越南人はミィを好むようである。食事の途中、経済・農村開発学部（Faculty of Economics and Rural Development）のグエン・マウ・ズン（Nguyen Mau Dung）さんの一団が入って来て、隣のテーブルに陣取る。簡単に挨拶を交わす。ズンさんも、九州大学大学院農学研究科で博士（農学）の学位を取った一人である。

中央実験室で

ダン・ヴー・ビン（Dang Vu Binh）学長の表敬訪問が午後3時に延びたため、昼食から戻って、午後1時頃からほぼ2時間を土地資源環境学部の中央実験室で過ごすことになる。中央実験室は、「ハノイ農業大学強化計画」の5年間を通して、実験機器・機材や器具が供与され、整備された。プロジェクト終了後1年半が経つけれど、ほぼ全ての機器が正常に使えており、実験室は整頓され、人々が動き、実験室の日常活動が見られるのは、「ハノイ農業大学強化計画」の成果であり、中央実験室の管理体制・運営システムの継続と管理責任者であるヒュー・タインさんの責任感の大きさと効率的なサポート体制によると考える。フイとチャン・ティ・レ・ハ（Tran Thi Le Ha；ベルギーのGent大学で修士の学位を取る）が、中央実験室所属の教員としてタインさんをサポートし、彼らの指導の下、4年生が卒業論文のための実験を行う。農学部中央実験室が、鍵が掛かって閉まっていたのとは好対照であった。

中央実験室には少し遅れてチャもやって来て、チャからVietnam Soil Science Journal, No.21(2005)をもらう。この雑誌は原則年1回発行され、越南の土壌学関連では最高のレベルにあると聞く。目次は越語と英語で書かれ、英語の目次によると、Part 1: Soil: Biologico-Chemico-Physical Properties, Part 2: Fertilizer - Plant Nutrition, Part 3: Soil Classification - Land Evaluation - Land Use, Part 4: Water & Soil Environment - Soil Erosion, Part 5: Informationの5つのパートに分かれ、33の論文、2つのノート、5つの記事が掲載される。いずれも越語で書かれ、論文には英文サマリーが付く。33の論文のうち、ハイさんが1つ、ヒュー・タインさんが4つ、チャが2つの論文の著者（ハイさんとヒュー・タインさんは共著で、チャは単著）になっており、合わせて7つの論文が土壌学研究室（九州大学）で学んだ人によって書かれているのは、留学/研修の大きな成果であり、成果の継続であると自己評価する。ハイさんの

論文の表題は“The relation between physical, chemical characteristics and clay mineral component of some degraded gray soil profiles in Vietnam”であり、ハイさんの研修成果として、同様の表題で既に九州大学大学院農学研究院紀要に公表しているが、ハイさんの弁明では、その論文にハイさん自身の考えを加えて書き直したもので、私と海江田明大が共著者として載る。いずれにせよ、論文に纏め、投稿する姿勢・意欲が大事である。

彼等との話が一段落して、久保さんを連れて、中央実験室の在る3階建ての建物を案内する。途中で、グエン・ディン・マイン (Nguyen Dinh Manh) さんに会う。マインさんとも長い付き合いになる。マインさんは土地・水資源管理学部の前副学部長で、退職後も大学で学生を指導し、研究を続ける。チャの義理の兄になる人である。建物の幾つかの教室では授業が行われ、教室一杯の学生が熱心に教員の話聞いていた。教育媒体は専ら黒板であった。女子学生は清楚な服装をして、髪を後ろに垂らしている。その髪がいずれの学生も黒々としているのが印象的であった。

午後3時、別の会議から急ぎ戻られたダン・ヴー・ビン学長を、管理棟2階の会見室に表敬訪問し、今回の訪問の目的と、12月の合同シンポジウム開催と、ハノイ農業大学と九州大学大学院農学研究院の共同研究の継続と強化について話す。会見には、グエン・ヴァン・ラン (Nguyen Van Lanh) 国際関係局長とハイさんが同席する。終わって、同じ階に在る JICA プロジェクトの時の専門家室を見に行く。既に、ベルギーの機関との共同プロジェクトの部屋になっており、そのことを確認しただけで引き上げる。

Bia Hoi の店

午後3時半にハノイ農業大学を出て、4時15分にハノイホテルに帰り着く。6時半に3人で待ち合わせ、ホテル近くの Bia Hoi の店まで夕食を取りに行く。ホテルから Bia Hoi の店へ行くには、途中ザンヴォー通りを渡らねばならない。交通量の多い大きな通りといっても近くに交通信号や横断歩道など無く、通りを渡るには車やバイクの流れを縫って渡るのが、その流れを未だに読みきれず、いつも一苦労で、渡り終えるとほっとする。Bia Hoi は毎日工場から運ばれ、その日のうちに消費されるビールのことで、ジョッキに入って運ばれてくる。日本の生ビールより色が薄く、酸がないように感じる。料理は、牛肉の炒め物、鳥賊の炒め物、揚げ出し豆腐、フライドポテトを注文する。

黒澤さんはハノイに2年間住んだことがあり、料理の注文は黒澤さんをお願いする。炒め物には野菜が付くが、生で出てくる野菜と炒める野菜は区別されているように見える。最後に一人ずつ、揚げたミイの固麺を頼む。牛肉と野菜のとりみづけが具として上に載る。3人で締めて162,000VN ドン。

越南人の食欲はすばらしく、昨日のヤギ料理店でもそうだったが、今日の Bia Hoi の店でも多くの人で賑わっていた。Bia Hoi の店で、ウエイトレスの一人に年齢を聞いたところ、Hai-muoi-mot (21) という答えだった。ウエイトレスの多くが二十歳前後であろう。ホテルへの帰りに、集合住宅の1階にあるスーパーマーケットに寄る。私は蓮花濾袋茶1箱(20パック入り)を13,000VN ドンで購入し、8時過ぎには部屋に戻る。その前、ハノイホテルの一角に在るパンとケーキを売る店を覗く。若い女店員が一人店番をしている。ケースの外から見て回るだけだったが、パンが安いものでも1つ5,000VN ドン、アップルパイは1つ150,000VN ドンで、十分な値段である。それでも店が成り立っているところをみれば、ホテル客がメインとしても、越南人にもこれらを買う層が着実に増えてきているのであろう。蓮花濾袋茶、帰国後の試飲では漢方薬を飲んでいるようで苦味が強く、タイグエン緑茶に勝るものではなかった。

果樹・野菜研究所訪問

3月15日(火)、朝6時に起床、昨夜は午後10時に就寝した。道路が雨で濡れている。乾季から雨季に移り変わるハノイの3月の常らしく、今日は一日中曇りで、小さな雨が落ちていた。7時から揃って朝食。気にはしているのだが、アジアにいる気安さからか、ついつい食べ過ぎてしまう。バイキングスタイルの朝食では、テーブルに運んでくる料理は三者三様で、各人の人生経験が表れる。8時10分過ぎにハノイホテルを出る。車の中のハイさんの話では、乾季に雨が降らず、紅河を始め各河川の水位はここ30年で最低のレベルにある；日曜日(13日)からの雨で、充分とは言えないが、農民は農作業に取り掛かる；今は冬作物(winter crops)が終わり、春稲(spring rice)の移植の時期にあり、そのための耕起にも、畑作地帯の野菜にも水が必要である；4月半ばには雨季の雨がくる。雨のハノイ、チュオンズオン橋から見るロンビエン橋は霞んでかすかに見えるだけ。8時50分にハノイ農業大学に着く。

今日の予定は、久保さんの要望で、野菜関連の研究

所と民間の種子会社を訪問して話を聞くことで、黒澤さんとは別行動になる。ハイさんの同行を受けて、久保さんと再び車に乗り、ギエム・ティ・ビック・ハ(Nghiem Thi Bich Ha)さん(農学部園芸学科の上席講師(Senior Lecturer)で野菜の専門家:グエン・ヴィエト・トゥン(Nguyen Viet Tung)前学長の奥さん)を、大学の正門からすぐの家まで迎えに行く。彼女が出て来るまで、車を降りて立ち話をしながら暫らく待ち、そこを9時に出て、車で数分の所に在る果樹・野菜研究所(Research Institute of Fruits and Vegetables: RIFAV)を訪問する。果樹・野菜研究所は農業農村開発省(Ministry of Agriculture and Rural Development: MARC)傘下の一つの研究所で、ハイさんの事前の話では、農業農村開発省からの研究員を得て、活発な研究活動を行っているとのこと。果樹・野菜研究所訪問の目的は、越南における野菜生産の概況を知り、関連の情報を得ることである。果樹・野菜研究所では、野菜・香辛料部(Department of Vegetables and Spices)のグエン・チョン・マイ(Nguyen Trong Mai)部長が出て来て応対してくれる。マイ部長から貰った名刺にはHead of Vegetables Departmentとあり、最近Department of Vegetables and Spicesへ名称変更になったか、あるいはDepartment of VegetablesとDepartment of

Spicesが統合したものと思われ、越南における香辛料の持つ重要性和効率を求めての頻繁な組織改編がうかがわれる。訪問に際して入手したパンフレットによれば、果樹・野菜研究所は1990年に設置され、次の各部から成る: Vegetables and Spices, Fruit Crops, Flower and Ornamental Plant, Postharvest Technology, General Laboratory, Marketing and Economics. パンフレットには7部とあるが実際には6部しか記述されず、1部抜け落ちているのか、あるいは改組して6部になったのか、いずれにせよ頻繁な組織改編(再編・統合)にパンフレットが追いつかない現状がうかがえる。

マイ部長は、会談の冒頭で、果樹・野菜研究所の代表ではないことをしきりに強調される。このことには、訪問者である我々の地位・身分の他、ハノイ農業大学側から果樹・野菜研究所への訪問依頼がどのレベルでなされたかも関係しているのであろう。そのため、研究所訪問にはつきものの、組織を代表しての紋切型の歓迎挨拶や組織の沿革・概要についての説明は全く無く、話は、最初から、越南恐らくは紅河デルタにおける野菜の生産状況、即ち栽培される野菜とその生産時期に集中する。野菜の調理法も話題に上る。会談の成果として、表1に越南/紅河デルタにおける野菜の生産状況と利用法を、表2に利用される野菜の食用部位

表1 野菜の生産状況と利用法.

生産状況

More than 70 kinds of vegetables

1. Leaf vegetables (葉菜類) : main production

winter season : キャベツ, コールラビ, カリフラワー, ブロッコリ, ハクサイ, ケールカイラン, タマネギ, ガーリック

summer - spring season : クリゼンテム (キク), ブラシカ

March - August (summer season) : カンコン

2. Root vegetables (根菜類)

winter - spring season : ニンジン, ダイコン, チャイニーズラディシュ, ジャガイモ

3. Fruits vegetables (果菜類)

September - April : メロン, キュウリ, トマト, カボチャ (squash), ヘチマ, ニガウリ, ユウガオ

4. Bean (豆類)

winter - spring season : French bean, common bean, sweet bean

5. Bamboo shoot (タケノコ)

6. Spicy vegetables (香草/香味野菜) : チリ, ガーリック, ショウガ, コリアンダー, セロリ

7. Mushroom (キノコ) : 生産が増加している.

8. Baby corn, sweet corn (トウモロコシ)

利用法

1. 加工 (processing) や油で揚げることはいない.

2. たいていは調理し (mostly cooking), 茹でたり, 炒めたりする, あるいはスープの材料にする.

3. タロの若い (young stage) の茎を, 豆腐, カタツムリ (snail), ポークボーンと一緒に煮る.

4. 生で食べる (direct eating) のは香草のみ.

表2 野菜の食用部位.

番号 越名	学名	英名	和名	食用部位
1-Ho bau bi	Cucurbitaceae		ウリ科	
1 Bau	<i>Cucurbita lagenaria</i>	gourd	和名不明	young fruit (未熟果)
2 Bau nam	<i>Lagenaria siceraria</i>	bottle gourd	ユウガオ (ヒョウタン)	young fruit (未熟果)
3 Bi dao (bi xanh)	<i>Beninca hispida</i>	wax gourd	トウガン	fruit (果実)
4 Bi do (bi ngo)	<i>Cucurbita pepo</i>	squash	ペポカボチャ	fruit (果実)
5 Bi ngoi	<i>Cucurbita pepo</i> var. <i>melopepo</i>	squash	ペポカボチャの変種	young fruit (未熟果)
6 Dua chuot	<i>Cucumis sativus</i>	cucumber	キュウリ	young fruit (未熟果)
7 Dua hau	<i>Citrullus lanatus</i>	watermelon	スイカ	mature fruit (完熟果)
8 Dua bo	<i>Cucumis melo</i> var. <i>cantalupensis</i>	melon	カンタロープ (カンタロープメロン)	mature fruit (完熟果)
9 Dua thom	<i>Cucumis melo</i>	musk melon	マスキメロン	mature fruit (完熟果)
10 Dua gang	<i>Cucumis melo</i> var. <i>inodorous</i>	cassava melon	ウインターメロン	young fruit (未熟果)
11* Muop	<i>Luffa cylindrica</i>	singkwa towel gourd	ヘチマ	young fruit (未熟果)
12* Muop huong	<i>Luffa acutangula</i>	angled loofah	トカドヘチマ	young fruit (未熟果)
13 Muop dang	<i>Momordica charantia</i>	bitter gourd	ニガウリ	young fruit (未熟果)
14* Su su	<i>Sicyos edulis</i>	chryote	ハヤトウリ	young fruit (未熟果)
2-Ho bim bim	Convolvulaceae		ヒルガオ科	
15* Rau muong	<i>Convolvulus impomoea septans</i>	water convolvulus	カンコン	stem, leaf (茎, 葉)
16 Khoai lang	<i>Impomoea batatus</i>	sweet potato	サツマイモ (カンショ)	stem, leaf, root (茎, 葉, 塊根)
3-Ho bong	Malvaceae		アオイ科	
17 Dau bap	<i>Hibiscus esculentus</i>	okra, lady's finger	オクラ	young fruit, seed (未熟果, 種子)
4-Ho Ca	Solanaceae		ナス科	
18* Ca chua	<i>Lycopersicon lycopersicum</i>	tomato	トマト	mature fruit (完熟果)
19* Ca chua anh dao	<i>Lycopersicon esculentum</i>	tomato	トマト	mature fruit (完熟果)
20* Ca phao	<i>Solanum torvum</i>	plate brush	和名無し	green fruit (緑色果)
21 Ca bat	<i>Solanum melongenna</i>	eggplant	ナス	green fruit (緑色果)
22 Ca tim	<i>Solanum coagulans</i>	eggplant	ナス	green fruit (緑色果)
23 Ot cay	<i>Capsicum annuum</i>	hot pepper	トウガラシ	mature fruit (完熟果)
24 Ot ngot	<i>Capsicum annuum</i> var. <i>grossum</i>	sweet pepper	ピーマン	green fruit (緑色果)
25 Khoai tay	<i>Solanum tuberosum</i>	potato	ジャガイモ	root (塊茎)
5-Ho cuc	Compositae		キク科	
26 Sa lach	<i>Lactuca sativa</i>	lettuce	チシャ	leaf (葉)
27 Sa lach xoan	<i>Lactuca sativa</i> var. <i>crispa</i>	curled lettuce	リーフレタス	leaf (葉)
28 Cai cuc	<i>Chrysanthemum coronarium</i>	garlan	シュンギク	stem, leaf (茎, 葉)
29 Rau ma tia	<i>Emilia sonchifolia</i>	emilia	ウスベニニガナ	stem, leaf (茎, 葉)

30	Rau ngo	<i>Enydra fluctuans</i>	buffalo spinach	和名無し	leaf (葉)
31	Rau khuc	<i>Gnaphalium indicum</i>	cudweed	ハハコグサの仲間	leaf (葉)
32*	Rau diep	<i>Lactuca serriola</i> var. <i>sativa</i>	lettuce	チシャ	leaf (葉)
33*	Rau tau bay	<i>Gynura crepidioides</i>	gynura	スイゼンジナの仲間	leaf (葉)
34	Xunon	<i>Blumea myriocephala</i>		タカサゴギクの仲間	leaf (葉)
	6-Ho Ca phe	Rubiaceae		アカネ科	
35	La mo	<i>Paederia tomentosa</i> (<i>Paederia verticillata</i>)		ヘクソカズラの仲間	leaf (葉)
	7-Ho Dau	Leguminosae		マメ科	
36	Dau xanh	<i>Vigna radiata</i>	mungbean	リョクトウ	stem sprout (頂芽)
37	Dau tuong	<i>Glycine max</i>	soybean	ダイズ	seed, stem sprout (種子, 頂芽)
38*	Dau dua	<i>Dolichos sinensis</i>	cowpea	ササゲ	young fruit (未熟果)
39	Dau van trang	<i>Lablab purpurea</i>	lablab	フジマメ	young fruit (未熟果)
40	Dau Ha lan	<i>Pisum sativum</i>	garden pea	エンドウ	young fruit, seed (未熟果, 種子)
41	Dau rang ngua	<i>Vicia faba</i> var. <i>equina</i>	horse bean	ソラマメ (の中粒種)	seed (種子)
42	Dau co ve leo	<i>Phaseolus vulgaris</i>	pole bean	インゲンマメ	young fruit (未熟果)
43	Dau co ve lun	<i>Phaseolus vulgaris</i> var. <i>napus</i>	kidney bean	インゲンマメの変種	young fruit (未熟果)
44	Cu dau	<i>Pachyrrhizus erosus</i>	yam bean	クズイモ	root (根)
45	Dau rong	<i>Psophocarpus tetragonolobus</i>	winged bean	シカクマメ	young fruit (未熟果)
46	Rau rut	<i>Neptunia prostrata</i>	water mimosa	ミズオジギソウ	stem, leaf (茎, 葉)
	8-Ho Gung	Zingiberaceae		ショウガ科	
47	Gung	<i>Zingiber officinale</i>	ginger	ショウガ	root (塊茎)
48*	Rieng	<i>Alpinia officinarum</i>	Siamese ginger	リョウキョウ, コウリョウキョウ	root (塊茎)
49*	Nghe	<i>Curcuma longa</i>	yellow ginger	ウコン	root (塊茎)
	9-Ho Hoa hue	Liliaceae		ユリ科	
50	Mang tay	<i>Asparagus officinalis</i>	asparagus	アスパラガス	sprout (幼芽)
51	Hanh hoa	<i>Allium fistulosum</i>	welsh onion	ネギ	stem, leaf (茎, 葉)
52	Hanh nen	<i>Allium</i> sp.	common onion	ネギ一般 (英名からは タマネギ <i>Allium cepa</i>)	root (鱗茎)
53	Hanh tam	<i>Allium ascalonicum</i>	shallot	シャロット	root (鱗茎)
54	Hanh tay	<i>Allium cepa</i>	bulb onion	タマネギ	root (鱗茎)
55	Kieu	<i>Allium triquetum</i>	triquetous	和名無し	root (鱗茎)
56	Toi	<i>Allium sativum</i>	garlic	ニンニク	root (鱗茎)
57	Toi tay	<i>Allium porrum</i>	leek	リーキ	stem, leaf (茎, 葉)
58*	He	<i>Allium odorum</i>	Chinese chive	ニラ	stem, leaf (茎, 葉)

10-Ho Hoa tan	Umbelliferae		セリ科	
59 Can tay	<i>Apium graveolens</i>	celery	セロリ	stem, leaf (茎, 葉)
60 Ca rot	<i>Daucus carota</i> var. <i>sativa</i>	carrot	ニンジン	root (根)
61 Rau mui	<i>Coriandrum sativum</i>	coriander	コエンドロ (コリアンダー)	stem, leaf (茎, 葉)
62 Mui tau	<i>Eryngium foetidum</i>	fit weed	エリンゴ (ノコギリコリアンダー)	leaf (葉)
63 Can ta (can nuoc)	<i>Oenanthe stolonifera</i>	water dropwort	セリ	stem, leaf (茎, 葉)
64 Mui tay	<i>Petroselinum sativum</i>	parsley	パセリ	leaf (葉)
65 Thi la	<i>Foeniculum vulgare</i>	fennel	ウイキョウ	stem, leaf (茎, 葉)
66 Rau ma	<i>Centella asiatica</i>	Indian pennywort	ツボクサ	leaf (葉)
11-Ho Hoa moi	Labiatae		シソ科	
67 Kinh gioi	<i>Elsholtzia cristata</i>	cockscomb mint	ナギナタコウジュ (の仲間)	leaf, shoot (葉, 新芽)
68 Hung que	<i>Ocimum basilicum</i>	sweet basil	バジル (バジリコ)	leaf, shoot (葉, 新芽)
69 Hung chanh	<i>Coleus aromaticus</i>	creeping mint	ニシキジソ	leaf, shoot (葉, 新芽)
70 Tia to	<i>Perilla ocymoides</i>	perilla	シソ	leaf, shoot (葉, 新芽)
71 Bac ha	<i>Mentha piperita</i>	peppermint	セイヨウハッカ	leaf, shoot (葉, 新芽)
12-Ho Ho tieu	Piperaceae		コショウ科	
72 Ho tieu	<i>Piper nigrum</i>	pepper	コショウ	seed (種子)
73 La lot	<i>Piper lolot</i>	lolot	コショウの仲間	leaf (葉)
13-Ho Du du	Caricaceae		パパイヤ科	
74 Du du	<i>Carica papaya</i>	papaya	パパイヤ	green fruit (緑色果)
14-Ho Day	Tiliaceae		シナノキ科	
75* Rau day	<i>Corchorus olitorius</i>	dolichocarpous karri	シマツナソ	leaf, shoot (葉, 新芽)
15-Ho Gien	Amaranthaceae		ヒユ科	
76 Rau gien	<i>Amaranthus blitum</i>	amaranth	アマランサス	stem, leaf (茎, 葉)
16-Ho Lua	Gramineae		イネ科	
77 Mang tre	<i>Bambusa blumeana</i>	bamboo sprout	タケノコ	sprout (幼芽)
78 Mang truc	<i>Thyrsostachys siamensis</i>	bamboo sprout	タケノコ	sprout (幼芽)
79* Ngo rau	<i>Zea mays</i>	baby corn	トウモロコシ	young fruit (未熟果)
80 Sa	<i>Cymbopogon citratus</i>	lemon grass	レモングラス	stem (茎)
81 Nieng	<i>Zizania latifolia</i>	kuw-sun	マコモ	stem (茎)
17-Ho Mung toi	Baseliacea		ツルムラサキ科	
82 Mung toi	<i>Basella rubra</i>	Indian spinach	ツルムラサキ	shoot, leaf (新芽, 葉)
18-Ho Moc nhi	Auriculariaceae		キクラゲ科	
83 Moc nhi	<i>Auricularia auricula</i>	Jew's ear mushroom	キクラゲ	leaf (葉)
19-Ho Nam tan	Agaricaceae		ハラタケ科	

84*	Nam huong	<i>Agaricus rhinozetis</i>	thintop mushroom	和名は不明	stem, leaf (茎, 葉)
85	Nam mo	<i>Agaricus bisporus</i>	champignon	マッシュルーム (ホワイト マッシュルーム)	stem, leaf (茎, 葉)
20-Ho nam Ananit		Ananitaceae		テングタケ科	
86	Nam rom	<i>Volvaria volvacea</i>	straw mushroom	フクロタケ	stem, leaf (茎, 葉)
21-Ho Ray		Araceae		サトイモ科	
87*	Khoai so	<i>Colocasia esculenta</i>	taro	サトイモ	stem (球茎)
88*	Khoai mon	<i>Colocasia antiquorum</i> var. <i>esculenta</i>	coco	サトイモ	stem (球茎)
89	Khoai nua	<i>Amorphophalus riviery</i>	Devil's tongue	コンニャク	stem (球茎)
90*	Doc mung	<i>Colocasia esculenta</i>	Indian taro	サトイモ	petiole (葉柄)
22-Ho Rau ram		Polygonaceae		タデ科	
91*	Rau ram	<i>Polygonum odoratum</i>	Fragans knotweed	和名無し	leaf (葉)
92*	Rau dang	<i>Polygonum aviculare</i>		ミチャナギ	leaf (葉)
93*	Rau ma ngo	<i>Polygonum perfoliatum</i>		和名無し	leaf (葉)
23-Ho Sung		Nymphaeaceae		スイレン科	
94	Sung	<i>Nymphaea stellata</i>	water lily	スイレン	flower, stem under ground (花, 根茎)
24-Ho Sen		Nelumbonaceae		ハス科	
95	Sen	<i>Nelumbo nucifera</i>	lotus	ハス (レンコン)	stem under ground (根茎)
25-Ho Rau sam		Portulacaceae		スベリヒユ科	
96	Rau sam	<i>Portulaca oleracea</i>	purslane	スベリヒユ	shoot, leaf (新芽, 葉)
26-Ho la giap		Saururaceae		ドクダミ科	
97	Diep ca	<i>Houttuynia cordata</i>		ドクダミ	leaf (葉)
27-Ho Thai lai		Commelinaceae		ツユクサ科	
98	Thai lai trang	<i>Commelina benghalensis</i>	dayflower	マルバツユクサ	shoot, leaf (新芽, 葉)
28-Ho Thau dau		Euphorbiaceae		トウダイグサ科	
99	Rau sang	<i>Phyllanthus elegans</i>	melientha	コミカンソウの仲間	stem, leaf (茎, 葉)
100	Rau ngot	<i>Sauropus androgynus</i>	star gooseberry	アマメシバ	leaf (葉)
29-Ho Thap tu		Crucifera		アブラナ科	
101	Su hao	<i>Brassica oleracea</i> var. <i>gemmifera</i>	kohlrabi	コールラビ	root (根)
102	Bap cai	<i>Brassica oleracea</i> var. <i>capitata</i>	cabbage	キャベツ	stem, leaf (茎, 葉)
103	Cai xanh	<i>Brassica juncea</i>	mustard	カラシナ	stem, leaf (茎, 葉)
104*	Cai thia	<i>Brassica chinensis</i>	Chinese mustard	タイサイ	stem, leaf (茎, 葉)
105*	Cai be	<i>Brassica algoblabra</i>	Chinese kale	ケールカイラン	stem, leaf (茎, 葉)
106	Cai bao	<i>Brassica pekinensis</i>	Chinese cabbage	ハクサイ	stem, leaf (茎, 葉)
107	Cai cu	<i>Raphanus sativus</i>	radish	ダイコン	root (根)

108*	Cai lan	<i>Brassica oleracea</i> var. <i>alboglabra</i>	kaiilaan	ケールカイラン	stem, leaf (茎, 葉)
109	Sulo trang	<i>Brassica oleracea</i> var. <i>botrytis</i>	cauliflower	カリフラワー	flower, leaf (花, 葉)
110	Sulo xanh	<i>Brassica oleracea</i> var. <i>italica</i>	broccoli	ブロッコリ	flower, leaf (花, 葉)
111	Cu cai	<i>Brassica campestris</i> ssp. <i>rapa</i>	turnip	カブ	root (根)
112	Cai xoong	<i>Nasturtium aquaticum</i>	watercress	クレソン	stem, leaf (茎, 葉)
113	Cai xanh ngot	<i>Brassica chinensis</i>	pakchoi	パクチョイ (チンゲンサイ)	stem, leaf (茎, 葉)
114*	Cai dau	<i>Brassica parachinensis</i>	caisin	和名無し	stem, leaf, flower (茎, 葉, 花)
	30-Ho Thien ly	Asclepiadaceae		ガガイモ科	
115*	Thien ly	<i>Telosma cordata</i>	pergularia	イエライシャン	flower, young leaf (花, 未熟葉)
	31-Ho Rau Muoi	Chenopodiaceae		アカザ科	
116	Cai bo xoi (bina)	<i>Spinacea oleracea</i>	spinach	ホウレンソウ	stem, leaf (茎, 葉)
117*	Cu cai duong	<i>Beta vulgaris</i> var. <i>altissima</i>	sugar beet	テンサイ (ビート)	root (根)

備考

11: 英名はむしろ sponge gourd が適切か.

12: 英名はむしろ ten ridged gourd が適切か.

14: 学名はあるいは *Sechium edule*.

15: 学名はむしろ *Ipomoea aquatica*, 英名は swamp cabbage が適切か.

18, 19: トマトの学名は *Lycopersicon esculentum* で, *Lycopersicon lycopersicum* は異名.

19の英名を cherry tomato とするなら, その学名は *Lycopersicon esculentum* var. *cerasiforme*.

20: 直径 3 cm 位の小さなナスで, ナス栽培の接木用台木として使われている。「トルバム」という名前がある.

32: レタスの原種と考えられている野生レタス.

33: スイゼンジナの学名は *Gynura bicolor*.

38: 学名 *Dolichos sinensis* は *Vigna unguiculata* と同じ. 果樹・野菜研究所の資料の英名は yard long bean だった. 英名を yard long bean とするなら, 学名は *Vigna sinensis*, *Vigna sesquipedalis* あるいは *Dolichos sesquipedalis* であるべき.

48: 漢字でそれぞれ「良姜」, 「高良姜」と書き, 根の乾燥品を薬用とする.

49: 学名 *Curcuma longa* は *Curcuma domestica* と同じ.

58: 学名は *Allium tuberosum* が一般的.

75: ジュート (*Corchorus capsularis*) の仲間.

79: 植物名としてはトウモロコシだが, 野菜として未熟果を食する場合スウィートコーンまたはベイビーコーンと俗称される.

84: ハラタケ (キノコ) の仲間.

87, 88, 90: 87と90は同じ学名でサトイモを表し, 88の学名もサトイモで, この3つの学名は全てサトイモの学名である. しかし, 越名は3つ互いに違うので, 学名の付け方にミスがある可能性が指摘される.

91, 92, 93: この3つは全部イヌタデ (赤まんま) の仲間, ヤナギタデに似た辛味のある野菜. ヤナギタデの学名は *Polygonum hydropiper*.

104: タイサイの漢字名は「青菜」.

105, 108: この2つの学名は同じものを表し, *Brassica oleracea* var. *acephala* の方が一般的に用いられる (?).

114: 中国で「菜薹」, 青菜 (タイサイのこと) に類似した野菜.

115: 英名として mileguas もある.

117: 葉を食するのであれば和名はフダンソウ.

全体としての注釈: 和名は提示された学名に基づいている. 越名→学名にミスがあれば和名も間違っていることになる.

を示す。表2は、マイ部長から貰った越語で書かれた資料を、食用部位 (using parts) のみハイさんに英訳してもらったものである。野菜のどの部位を食するかによって調理法が異なり、そこに越南の食文化が反映される。表2の和名は、園芸学大久保敬教授のご教示による。和名の記述に際しては、大久保教授に多大なご尽力を願うこととなった。記して深甚なる謝意を表す。表2で番号に*を付したものは、備考として、脚注に説明を加えていることを示す。

会談の後、マイ部長に圃場を案内してもらおう。圃場に人影は無く、見て回る我々だけであった。冬作物の収穫後で、わずかにチリとミニトマトを見るだけで、それらも収穫末期にあった。ネット室内に人影を見て中に入り、ナスにトマトを接ぐ接木 (grafting) 作業を見る。若い男女が全て手作業で、両者をチューブで接いでいた。靴に付いた紅河デルタ特有の赤い土を落とし、マイ部長に礼を述べて、11時に果樹・野菜研究所を出る。ハさんを彼女の自宅の前で降ろし、土地資源環境学部の中央実験室に戻る。

停 電 中

戻ってみると、中央実験室の在る建物は停電中であった。そのためすぐに、キム・タイン食堂に昼食を取りに行く。今日は、昨日のチャの代わりに、中央実験室で実験している4年生が加わる。彼はバスでハノイ市内から通っている。昼食にカンコン (water convolvulus, swamp cabbage, morning glory; 空芯菜) の炒め物が出る。午前中の果樹・野菜研究所で話題になった野菜の一つである。吉田・菊池 (2001) の記述によれば、カンコンは東南アジアで最もポピュラーな野菜であり、水辺や水中、湿地で育ち、水に浮くように茎の中は空洞になっている。葉は全て、茎もポキッと折れるところは全部食べられ、クセのある味や臭いがない。食べやすいうえに、カロチンを豊富に含んでいる熱帯のホウレンソウとっていい野菜である。ぬめり感が強くなく (小さく)、久保さんの言では、日本で広まるかもしれないとのこと。昼食には揚春巻、揚げ豆腐も出る。今日の最後はご飯、それにスープをかけて食べる。スープにはハスの実とポークボーンの他、数種の具が入る。ご飯に汁をかけてあるいはおかずを載せて食べる食べ方は、私も子供の頃この食べ方でよく食べていたし、越南に限らずアジアモンスーンでポピュラーに見る食べ方である。暫し食事と会話を楽しんで、12時半頃には連れ立って中央実験室に戻る。建物は依然停電中。

停電では何もできず、ハイさんと一緒に、久保さんを案内して大学構内を散歩する。女子寮の洗濯物は、相変わらず色とりどりに賑やかである。キャンパスの一番奥に、新しい学生寮が建設されていた。1年生が優先して入寮するとハイさんから聞き、彼の長男も入寮していたと聞く。中央実験室に戻り、トイレから戻ると、グエン・タット・カイン (Nguyen Tat Canh) さんが来ていた。カインさんは2人いる副学部長の一人で、「ハノイ農業大学強化計画」のカウンターパート研修で半年間九州大学生物環境調節センターに滞在したことがあり、ハイさんと並んで土地資源環境学部のキーパーソンである。カインさんは、ハバック省 (Ha Bac province) での出張講義から帰ってきたばかりのところだと言う。土地利用について、1日8時間の講義を1週間続けると聞く。この後、バクニン (Bac Ninh) 省とフンイエ (Hung Yen) 省でも出張講義を行うことになっていて、3月のこの後の予定は出張講義で全て潰れると聞く。

越南では省の分割が進み、カインさんから聞いたハバック省は、今ではバクニン省とバクザン (Bac Giang) 省に分かれる。ついでに越南の地方行政区分では、上位から Tinh (Province), Huyen (District), Xa (Commune) と区分され、これに対応して省、県、社と和訳する。社の下に村 (Lang (Village); 山岳地帯では Ban (Hamlet)) がある。ハノイはハノイ市 (Hanoi city) で (ハノイ省は無い)、市の下に District と Prefecture がある。Prefecture は市の中心部 (市街域) を成し、そのためここでは「区」と訳す。District は市中心部の周辺にある行政単位で、省の場合と同様「県」と訳す。District の下に Commune がある。

民間の種子会社訪問

午後2時に久保さん、ハイさんの3人でハノイ農業大学を出て、ハさんを再びピックアップし、民間の種子会社 (Private seed company) を訪問する。会社名はチャン・ノン種子会社 (Trang Nong Seeds Co., Ltd.; 荘農業種出入口公司) で、場所はハノイ市のコウゼイ区 (Cau Giay prefecture)。コウゼイ区では4、5階建ての新しい建物がどんどんと建っていて、チャン・ノン種子会社の建物も建ったばかりのようであった。チャン・ノン種子会社訪問にはハノイ農業大学の許可証が必要で、ハさんがそれを持参する。チャン・ノン種子会社への車の中、昼食の食べ過ぎからついうとうととしてしまう。数箇所を尋ねて、2時

50分にチャン・ノン種子会社に着く。チャン・ノン種子会社は、ホーチミン市に本社 (Head Office) があり、ハノイとニャチャン (Nha Trang) に支社 (Branch) がある。ハノイ支社のコン・ジェリイ (Kong Jerry) 支社長 (Manager) が、ノイバイ空港まで、ゴ・バイ・ディエン (Ngo Bai Dien; 呉沛鋌) 社長 (General Manager; 総経理) を迎えに行っており、彼らが帰るのを暫らく待って、3時から3時30分まで会社の業務内容について聞く。

会社訪問の目的は、紅河デルタでの種子の流通状況を知り、どのような種子が取り扱われ、入手可能であるかの情報を得ることであり、会談は英語で行われる。説明によれば、チャン・ノン種子会社では、各種作物 (メインは野菜と推測される) の種子を輸入し、販売人 (Dealer) を通して国内市場 (Domestic market) に卸す。輸入先は韓国、日本、タイ、中国、台湾で、午前中の果樹・野菜研究所ではタキイのカタログを見たが、チャン・ノン種子会社ハノイ支社にはサカタの種子カタログが置かれていた。扱う野菜は、スイカ、キュウリ、チリ、ニガウリ、ブラシカ、カランド (Chinese kale; ケールカイラン) など。余談ながら、カランドは、牛肉と一緒に炒めるかスープにするとおいしいそうである。チャン・ノン種子会社では、更に、地方の市場 (Local market) から在来品種 (Local varieties) の種子を収集する。飛び込み的な訪問で、また言葉の問題から、会社側が我々の訪問の意図を図りかねていたように見え、私としても越南での民間会社訪問は初めてで、彼らの意識や心情が掴めないところがあり、やや議論が噛み合わないところもあったが、民間の種子会社の活動の一端に触れることができたのは有意義であったし、人・物・情景ともに急速に変わっていく紅河デルタを垣間見た思いであった。

チャン・ノン種子会社は120年前に創立され、先祖は中国福建省の出身で、今のディエン社長で5代目になる、いわゆる華僑の会社である。社員は100人以上で、ハノイ支社には16人が勤める。全国に約100人の販売人を有する。この箇所を書いていた2005年4月30日は、1975年4月30日サイゴン (Sai Gon) が陥落して南ヴィエトナム (ヴィエトナム共和国) が崩壊し、越南が南北に統一されてからちょうど30年になる。チャン・ノン種子会社120年の歴史のうち、30年前の南北が統一され、南ヴィエトナムの共産化が始まった頃が最も苦しく、厳しかったのではなかろうか。南北統一に関連して常に念頭から離れないのは、ヒュイン・コン・トー (Huynh Cong Tho) のことである。南ヴィ

エトナム・カントー大学 (University of Can Tho) 農学部の手助であったトーは、1973年 JICA 技術協力のカウンターパート研修で単身来日し、九州大学農学部で学んでいたが、その後一度も帰国することなく米国で客死した。生きていれば2005年で62歳になる。

歓迎夕食会

チャン・ノン種子会社訪問を終えて、午後4時17分にハノイ農業大学土地資源環境学部中央実験室に戻る。建物は依然停電中で、黒澤さんの話では朝からずっと停電しているとのこと。最近では停電も余程少なくなってきたと思っていただけに、このような長時間の停電は驚きであり、やや裏切られた思いがして、この国の電力事情がまだ厳しい状況にあることを思い知らされる。4時半頃帰途に着き、ザーラム県での交通渋滞の影響を少し受けて、ハノイホテルまで1時間程かかり、5時半頃帰り着く。ハノイ市内は細かな雨が降り、子供を学校に迎えての帰りの二人乗りバイクは、後部座席の子供を合羽ですっぽり覆って走っていた。この種の遅さ、日本では見なくなって久しい。

午後7時から、越南料理レストラン Van Tue で、土地資源環境学部主催の歓迎夕食会。その前、ヴォン学部長専用と思われる赤色の車体の車で、ヒュー・タインさんがホテルまで迎えに来てくれる。学部長専用車は暫らく見ず、取り上げられたのではないかと考えていたが、また復活したようである。土地資源環境学部側の夕食会出席者は、グエン・ティ・ヴォン学部長、グエン・スアン・タイン副学部長、それにハイさんとヒュー・タインさん。スアン・タイン副学部長が夕食会に出て来るのは珍しい。土地資源環境学部による夕食会は、Van Tue ができてからはいつも Van Tue で、Van Tue にはそれ以外でもしばしば来ている。料理の内容で覚えているのは、野菜スープ、ポテトサラダ、キムチ、エビの油炒め、サイコロステーキ、揚げ豆腐、カンコンの油炒め。最後にフランスパンが出て、バターを挟んで食べる。

学部長、副学部長、ヒュー・タインさんが、入れ代わり料理を取って皿に入れてくれる。越南でのしきたりとして断るわけにもいかず、出されたものは全て食べる身には、食べ過ぎの要因になってしまう。飲物はワイン、ボトル2本を空けてしまう。Van Tue も大勢の客で賑わっていた。ここはいつ来ても繁盛しており、他の客に負けないように、食べて飲んで話して乾杯を繰り返し、1時間強飲食歓談して、8時20分頃ホテルに戻る。ハノイホテル内の Dragon Restaurant

(中国粵川廳：広東/四川料理，市内随一の味を誇る最高級中華料理店)では，民間会社の新年会で大いに盛り上がっていた。我々は越南料理を楽しみ，彼らは中華料理を味わう。今回の訪問では夜は比較的に時間があり，ホテルの部屋で椅子に座って，あちこち忙しくチャンネルを回してテレビを見ている。日本，韓国，中国，欧米系の放送が見られるが，その中では台湾の東風が最も性に合うようである。

国立土壤肥料研究所訪問

3月16日(水)，朝6時起床。路面は今朝も濡れている。しかし，状況は昨日よりも良く，7時過ぎの朝食の頃から薄日が漏れてくる。朝食の時，昨日ハさんがチャン・ノン種子会社訪問に許可証を持参したことに関連して，許可証について話題にする。15日の訪問で，ハさんは，果樹・野菜研究所には許可証を持参しなかったが，チャン・ノン種子会社には持参した。17日に予定しているハノイ市タンチ(Thanh Tri)県の新たな社での水質調査のために，ハイさんが許可証を用意し，カイン副学部長がそれにサインした。黒澤さんの言によれば，初めての訪問の時には許可証を持っていくが，2回目の訪問からは必要無く，また黒澤さんが土地資源環境学部の関係者に尋ねたところ，持参することに大した意味はないとの回答だったとのこと。結局のところ判然とはしないけれども，共産主義体制維持のための相互監視システムの一つであったものが，ドイモイ後もまだ慣例として残っているのではなかろうか。8時頃から薄日が射してくる。午前中は降ったり止んだりだったが，午後3時頃から本格的に晴れてくる。ハノイ滞在中晴間を見たのはこの時だけだった。

8時10分前にハノイホテルを出て，途中でヒュー・タインさんをピックアップし，訪問先である国立土壤肥料研究所(National Institute for Soils and Fertilizers: NISF)に向かう。国立土壤肥料研究所は，ハノイ市の西部に位置するトゥリエム(Tu Liem)県に在る。ノイバイ空港への途中の紅河に架かるタンロン(Thang Long)橋まで3kmの所に在り，この辺り一帯は国立の大学と研究所が集中する。タンロン橋への道路を途中から左に入り，細い路地を進む。路地に沿っての小さな家の前にはわずかばかりの野菜が並べられ，売られる。そこを過ぎて，道の右側に，春稲の移植が終わったばかりの水田が広がる。移植前の水田も見える。8時50分に国立土壤肥料研究所に着く。国立土壤肥料研究所は農業農村開発省に属する研究所で，1969年に設置され，越南における土壌・肥料分野

の研究をリードする。グエン・クアン・ハイ君(Nguyen Quang Hai; 2003年10月大学院生物資源環境科学府(国際開発研究特別コース)植物資源科学専攻修士課程に入学し，私が指導教員を務める)の越南での職場であり，そのための所長への表敬が訪問の目的である。

国立土壤肥料研究所では，ブイ・ヒュイ・ヒエン(Bui Huy Hien)所長(Director)とハイ君が玄関まで迎えに出て来てくれる。ヒエン所長の案内で，2階の，所長室に隣接する会談室に移り，簡単に挨拶を交わして，土産に持参した焼酎を手渡す。ヒエン所長は50歳位で，ソ連に11年間留学したと聞く。越南の50歳前後にはソ連留学組が多い。ハノイ農業大学土地資源環境学部のヴォン学部長とスアン・タイン副学部長も長期のソ連留学の経験を有し，昨夕のVan Tueでの歓迎夕食会の折聞いた話では，スアン・タイン副学部長の留学先はタシケントとのことだった。ヴォン学部長の留学先がモスクワであったことは既に聞かされている。ヒュー・タインさんもソ連に留学し，ペラルーシ農業大学で博士の学位を取得している。3人はロシア語に堪能で，通訳できるほどである。しかし，私は，1990年代以前の越南における農学研究の停滞は，その多くが教条主義的にソ連に留学したことにあると見ています。熱帯農業・水田稲作の彼らが寒地農業・畑作の国へ留学しても，得るものはほとんどなかったろうと考えている。実践であるべき農学が，理論だけに終わったであろうと推測する。

ヒエン所長との会談にはハイ君が加わり，途中チャン・ミン・ティエン(Tran Minh Tien)さんが顔を出す。ティエンさんは，2003年9～10月大学院農学研究大学院と熱帯農学研究センター担当で開催されたJICA研修に，越南から参加した5人のうちの一人である。ハイ君は土壌生成・分類部(Department of Soil Genesis and Classification)に籍があり，ティエンさんは土壌・作物・肥料・水分析部(Department of Analysis of Soil, Crop, Fertilizer and Water)に先月移動したと聞く。1時間を超えるヒエン所長との会談で，国立土壤肥料研究所の活動・組織・所員，農業農村開発省傘下の国立研究所の改編の方向性について説明を受け，越南における化学肥料の生産・輸入状況，販売価格，農地への施肥量，施肥効率について，質疑応答の形で情報を得る。ヒエン所長との会談の内容については表3に示す。

会談を終えて，ヒエン所長自らの案内で，国立土壤肥料研究所の幾つかの施設を見学する。国立土壤肥

表 3 国立土壌肥料研究所ヒエン所長との会談の内容。

1. 国立土壌肥料研究所

(1) 研究活動

- ① Soil research
- ② Fertilizer research
- ③ Soil environment research

研究成果を、普及センター及び農民に技術移転 (technology transfer) する。

(2) 組織

- ・ 4 研究部 (Research Department) から成る。

(2004年10月に組織改編を行い、6 研究部体制から 4 研究部体制に改組する)

Soil Genesis and Classification

Soil Environment Research

Soil Use and Management

Analysis of Soil, Crop, Fertilizer and Water

- ・ 全国に 4 センターがある。

ハノイ (Ha Noi) : Fertilizer Research

ホーチミン市 (Ho Chi Minh city) : Soil and Fertilizer Analysis, covering Mekong Delta and East of South regions

バクザン (Bac Giang) : Degraded Soil Research

ダクラック (Dak Lac) : Highland Soil Research, covering Highland area

(3) 所員

研究所全体 (全国) で166人 (内訳：博士，12人；修士，36人；学士，84人；技術員，残り)，

そのうち112人がハノイ本部とハノイセンターにいる。

(4) 活動事例

- ・ Soil environment research に関連して、全国の全ての土壌タイプをカバーして、土壌性質のモニタリングを行う。センター毎に、全国の 7 つの農業生態区域 (Agro-ecological region) を担当する。
- ・ 肥料品質管理 (Control of fertilizer quality) を担当する。
現在1,650タイプの肥料が流通する。

2. 農業農村開発省傘下の国立研究所の改編の方向性

現在，34の研究所 (Institute) とセンター (Center) がある under 農業農村開発省 (Ministry of Agriculture and Rural Development : MARD)。

内訳：農業関係，26；林業関係，4；水関係，4

↓

2005年に，34研究所・センターを12研究所・センターに改編する。

改編に際し，次の7研究所を Vietnam Agricultural Research Institute に統合する。

Research Institute of Agricultural Technology, Institute of Agricultural Genetics, Research

Institute of Fruits and Vegetables, Institute of Maize, National Institute for Soils and Fertilizers,

Research Institute of Plant Protection, Research Institute of Food Crops

↓

2010年に，次の 4 研究所に統合する。

Agricultural Institute, Forestry Institute, Water Institute, Strategy Institute

3. 化学肥料関連情報

(1) 肥料の国内生産

バクザン省とホーチミン市に在る工場で，年間それぞれ15万トン，70万トンの尿素を生産する。

(2) 肥料の輸入

肥料の輸入費用に年間6億米ドルを充てる。

窒素肥料の75%，リン肥料の30～35%，カリウム肥料の100%を輸入する。

(3) 肥料の国内価格

尿素：2,500ドン/kg (2003年) → 4,500ドン/kg (2005年)

DAP (磷酸二アンモニウム) 3,500ドン/kg (2003年) → 5,200ドン/kg (2005年)

塩化カリウム (KCl) : 2,800ドン/kg (2003年) → 3,400ドン/kg (2005年)

肥料価格の高騰は生産価格と輸入価格の上昇による。生産価格の上昇は石油価格の高騰による。

- (4) 肥料の国内消費量
 全国平均の、1回の作付け (per cropping) での、肥料の (N + P₂O₅ + K₂O) 合計の消費量：
 2001年, 178 kg/ha ; 2002年, 157 kg/ha
- (5) 紅河デルタでの施肥量
 春稲 (spring rice) : N, 120 kg/ha ; P₂O₅, 30~60 kg/ha ; K₂O, 30~45 kg/ha
 夏稲 (summer rice) : 春稲に比べて15%減
 トウモロコシ (maize) : N, 150 kg/ha ; P₂O₅, 60~80 kg/ha ; K₂O, 60~80 kg/ha
 野菜 (vegetables) : 年間12~15回の作付けを行い、施肥量は (N + P₂O₅ + K₂O) の合計で1,000 kg/ha にも達する。
- (6) 紅河デルタとメコンデルタでの施肥効率 (fertilizer use efficiency)
 様々な作物に対する平均の施肥効率: N, 35~45% ; P₂O₅, 20~25% ; K₂O, 40~45%
 それを2010年に、次の数値にまで上げる計画にある: N, 50~55% ; P₂O₅, 35~40% ; K₂O, 50~60%

料研究所には4つの部に加えて2つのセンターがあり、関係の部の管轄下で情報活動を展開する。土壌照合・情報センター (Soil Reference and Information Center) には全国から集められた土壌モノリスが関連のデータと一緒に展示され、肥料照合・情報センター (Fertilizer Reference and Information Center) では種々の化学肥料が展示される。続いて GIS 実験室 (GIS Laboratory) を見る。ここでは若い女性がコンピュータに向かい、入って来た我々に注意を払うこともなく忙しく作図していた。中央実験室 (Central Analytical Laboratory) はティエンさんが責任者を務める部署であり、各部屋を案内してくれる。部屋毎にやや中年の女性が張り付き、土壌・肥料・作物等の分析を担当し、そのための一般分析に必要な機器は揃っていた。土壌環境研究部 (Department of Soil Environment Research) では、部長のファム・クワン・ハ (Pham Quang Ha) さんがあちこち連れて回って色々と説明してくれる。研究所内の施設を見て回っている間中雨が降っていた。

一旦会談室に戻り、国立土壌肥料研究所の招待で、11時30分昼食を取りに行く。場所は近くに在る地質・採鉱大学 (Geology and Mining University) の食堂で、国立土壌肥料研究所側は、ヒエン所長、ハ部長、ティエンさん、ハイ君を含め、確か5人が出席する。この食堂も多くの人で賑わっていた。恐らく近くの国立研究所から食べに来ているのであろう。越南の人達の健啖さには驚くばかりである。ビールで乾杯を繰り返し、エビや snake fish, スス (Su su ; 和名はハヤトウリ)、カンコンなどを食しながら、1時間近く歓談し、親交を深める。ヒエン所長は、後で聞いたところではハイさんの親友とのことで、私とも気が合いそうである。12時45分厚く礼を述べて、国立土壌肥料研究所の人達と別れる。

市場巡り

—Hang Da 市場と Dong Xuan 市場—

ハノイ農業大学に行くヒュー・タインさんと別れ、午後1時過ぎハノイホテルに戻り、服を着替えて1時半再び車に乗り、ハノイ市内の市場巡りに行く。先ずハンザ (Hang Da) 市場に行く。度々ハノイを訪れながら、私はハンザ市場に来るのは初めてである。ハンザ市場では、生鮮野菜 (図1~3) を中心に見て回る。回りながら、これは何、あれは何と名前を確認し、時々カメラに写す。しかし、私のもう17年近く使っている旧式のカメラで市場の野菜を撮るのは結構大変で、手前に焦点を合わせると向こうがぼやけ、向こうに焦点を合わせると手前がぼける。そのため、なかなか思うような写真が撮れてこない。市場の2階は衣類売場になっていて、小さな店が幾つも並ぶ。ハンザ市場が日本人向けの旅行ガイドブックで紹介されて、日本人観光客が多く訪れるようになったためであろうか、女性店員の何人かは日本語で話しかけてきた。

ハンザ市場の野菜売場では、幾つかの区画 (大きさは3m×5m程度だったように思うが、あるいは区画によって大きさが異なっていたかもしれない) に分かれて、区画毎に人 (専ら女性) が張り付き、籠や箆に入れてあるいは直接台の上に置いて、少量で多種の野菜を売っていた。例えば図3では、これだけの中に、キャベツ、白菜、タロ、ジャガイモ、カボチャ、ナス、キュウリ、ハヤトウリ、コールラビ、香草、ライム、マッシュルーム、タマネギ、ネギ、インゲンマメ、スターフルーツを確認できる。その他図2には、ガック、ショウガ、ニンニク、カキを見ることができ、区画毎の特徴が現れる。

コールラビを最初に見たのは、1998年1月のラオスの首都ヴィエンチャンだった。通りに籠に入れられて

売られているのを見て、同行の大久保敬さんに聞いて知った。ただ、食べたことはないと思う。野菜売場、これまではその地域の農業生産状況との関連で見てきたが、昨日果樹・野菜研究所とチャン・ノン種子会社を訪問した経験から、今後はその地方のこれら野菜を使った料理法との関連でも見ていく必要があることを感じる。ハンザ市場に2時20分までいて、5分程でドンファン (Dong Xuan) 市場に着いて、ここを2時25分から3時30分まで1時間近く見て回る。市場を見て回る時間が決まるのは、運転手との待ち合わせ時刻を予め決めておくため、その時刻にならないと車が来ないからである。そのため、時間配分を間違えると、市場がいかに楽しい場所とはいえ、同じ所をぐるぐると何度も回る羽目になる。

ドンファン市場は、ハノイに来る度に来ている。人々の熱気とバイタリティを感じ、ハノイで最も好きな場所の一つである。ドンファン市場には生鮮野菜は無く、代わりに魚介類の乾物、茶などの嗜好品 (図4)、菓子類、キノコ類、調味料、アルコール類、日曜雑貨、旅行用バッグ、履物、帽子 (図5)、玩具などが1階で売られ、2階は衣料品売場となっていて、生地や既製品が並べられ、積み上げられて売られている。品揃えでは、今回携帯電話機が多く売られているのが前回 (2003年11月) と違っていた。タイグエン (Thai Nguyen) 茶 (緑茶) 1kg を5万VNドンで購入する。ドンファン市場を見て回っている頃から本格的に陽が射してくる。陽が射してくるとさすがに暑さを感じる。それでもむっとする暑さではなく、爽やかな暑さである。図6はドンファン市場傍 (道を挟んで向こう側の建物) の衣料品売場、図7はドンファン市場の建物自体、図8は市場近くの建物で、ハノイ旧市街 (Old Hanoi) の町家の名残を残し、間口が狭く、奥行きが長い。

ドンファン市場を見て、レヴァンヒュー (Le Van Huu) 通りに行く。ハノイ市内には、ハイバーチュン (Hai Ba Trung) 通り、リタイトー (Ly Thai To) 通り、ルオンディンクア (Luong Dinh Cua) 通りなど、様々な時期に様々なレベルで国家建設に関わった人の名を冠した通りが多い。レヴァンヒュー通りもその一つである。Cafe Mai で、ダクラク (Dak Lac) コーヒー400g (200g×1, 100g×2) を購入する。総じて72,000VNドン。続いて、還剣湖の近くに在る、日本で言えばデパートに当たるチャン・ティエンプラザ (Trang Tien Plaza) を見て回る。ここに來たのは初めてである。店内は照明で明るく、空間はゆった

りとしている。上下の階への昇降にはエスカレーターがあり、精選された品揃えではあるが、その分高価格である。私自身は、チャン・ティエンプラザの優雅さ・上品さよりも、ドンファン市場の雑踏、混雑、活気を好む。チャン・ティエンプラザを3時55分から4時30分まで見て回り、4時40分過ぎにハノイホテルに帰着する。

越 南 料 理

前日、カインさんが16日の夕食に招待すると話していたので、午後7時まで部屋で待っていた。しかし、待っていたけどその時刻まで何の連絡も無かったので、事情が変わり、来られなくなったのだらうと勝手に思い込んで、3人で、14日のBia Hoiの店の少し手前に在るPumpkin Caféに夕食を取りに出かける。Pumpkin Caféでは、瓶ビールを飲み、揚げ出し豆腐、牛肉とタマネギの炒め物 with チリ、季節野菜とマッシュルームの炒め物、骨付き豚肉のから揚げ with スパイスを食す。質量共に充分で、ほぼ全てを残さずに食べる。越南料理は油で炒める料理が多く、最後にスープとご飯が出る。スープは鶏肉と野菜のスープ、それをご飯にかけて食べる。インディカ米は汁かけご飯によく合う。ジャポニカ米よりも汁かけご飯に合うように思う。3人で合わせて210,000VNドンを払う。

Pumpkin Caféを8時に出て、サムソンが出資しているスーパーマーケットに回り、ここでインスタントフォー4袋 (フォーガー (Pho Ga) とフォーボー (Pho Bo) を2袋ずつ) を4,800VNドンで買い、9時前にホテルに戻ったところ、「ホテルまで来たけど出た後だった」というカインさんのメッセージが残されていた。残念だが時既に遅く、なす術無し。このことは、今回のハノイ訪問で唯一の心残りとなった。カインさんのメッセージは、スーパーマーケットからホテルへ帰る時に最も恐れていたことではあったが、食事にかこつけてまた何か頼まれるのではないかと、自分の中にも逃げていた気持ちがないでもなかった。そうでなければ、とことん待っていたであろう。インスタントフォー、帰国後自分で食することになったが、塩辛いだけで、やはりインスタントの味でしかなかった。

Tam Hiep 社での水質調査

3月17日 (木)、朝6時に起床、目覚まし時計のベルの音で起こされる。路面は湿り、所々乾いている。今朝は霧がひどい。窓から見る視界は50mもないだろう。8時20分にホテルを出て、ハイさんの案内を受けて南



図1 Hang Da 市場, 野菜売場 (1).



図2 Hang Da 市場, 野菜売場 (2).

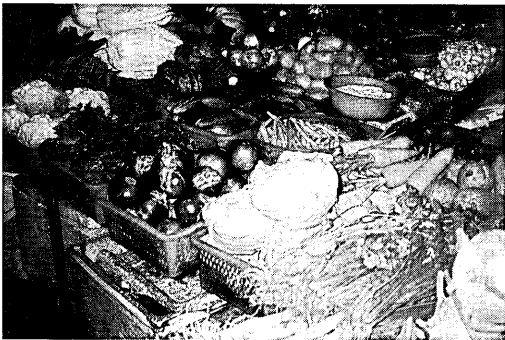


図3 Hang Da 市場, 野菜売場 (3).



図4 Dong Xuan 市場, 嗜好品売場.



図5 Dong Xuan 市場, 帽子売場.



図6 Dong Xuan 市場傍, 衣料品売場.



図7 Dong Xuan 市場建物.



図8 Dong Xuan 市場近くの建物.

へ向かう。目的は、ハノイ市の南部に位置するタエンチ県での水質調査である。ハノイ周辺農村での水質調査は、2002年10月から、タインスアン (Thanh Xuan) 社 (ハノイ市ソクソン (Soc Son) 県)、フードン (Phu Dong) 社 (ハノイ市ザーラム県)、フーラム (Phu Lam) 社 (バクニン省ティエンドウ (Tien Du) 県) の3箇所まで年2回測定してきている (黒澤・江頭, 2003)。これらは、いずれも、ハノイ市中心部から紅河を隔てて、ハノイ市の東部から北部にかけた地域であり、ハノイ市南部の農村地帯について新たに測定したいと、ハイさんに候補地の選定をお願いしていた。候補地選定の過程についての詳細を私は知らないけれど、ハイさんが事前に数箇所を当たり、その中で今日のタムヒエブ (Tam Hiep) 社が選定されたようである。来越前のハイさんへの連絡では、2箇所でも水質調査を行いたいと申し出ていたが、セクショナリズムの強い越南で、1箇所でも測定できたことは、ハイさんに大いに感謝である。

車は、南に向かう鉄道の線路に沿って走る。今日も朝は細かな雨が落ちる。8時47分線路を越えて右折する。道に沿って小さな店が並び、男達が屯して煙草を吸っている。8時55分頃タエンチ県タムヒエブ社の中心地に着く。場所はツューリエト (Tuu Liet) 村。ハイさんが歩いて社の関係者を呼びに行く間、車を降りて辺りを見て回る。9時8分ハイさんがバー (Ba) 氏を連れて来る。バー氏はタムヒエブ社の技術員の長 (Head of Technician) で、ハノイ農業大学経済・農村開発学部卒業との説明を受ける。依頼事をする場合窓であることが有利に働くのは、日本も越南も変わらないようである。バー氏は30歳代前半であろうか。タムヒエブ社での水質調査は初めてであり、これまでの慣例では、水質調査の前に社の共産党委員会あるいは人民委員会のリーダーを表敬訪問し、訪問の目的を述べ、茶を飲み、社の土地利用・農業生産概況を聞いてノートに記録し、水質調査後、彼らを昼食に招待して飲食歓談することになるはずで、そのために私がハノイへ来たようなものであった。しかし、今回のタムヒエブ社での水質調査ではその必要は無く、代わりに、水質調査の後に、黒澤さんと合わせて10万VN ドンを謝礼としてバー氏に渡しただけであった。加えて、ハイさんが土産を渡す。土産文化は、特に北部越南において良好な人間関係を保つ潤滑油であり、儒教に根ざして、日本を含め東アジアに共通する文化である。今日だけの経験からでは早計かもしれないが、また実務に終われ、ただ単に我々を構うだけの時間的

余裕がなかっただけということも充分に考えられるとしても、紅河デルタにおける市場経済の浸透につれて、農村の慣例やリーダーの特権が通用しなくなり、教条主義・権威主義が排され、社の発展のために真に力のある人が求められ、効率性・合理性・自主性が重視されるように、人々の意識が変わりつつあることを思う。

水質調査の前に、ハイさんから、タムヒエブ社の水供給システムについてその概要を知る。村の水供給システムには、公有としての社システム (Commune system) と私有システム (Private system) の二つがある。社システムでは、社の1箇所に80mの深さの深井戸を掘り、社が管理し、汲み上げた水を各農家に配給する。農家は、配給された水を飲用 (drinking) と調理用 (cooking) に使う。私有システムでは、農家が自身で浅井戸を掘り (井戸の深さは農家によって異なる)、専ら洗濯・洗浄 (washing) に用いる。汲み上げた水の水質が比較的良好な場合には、濾過後飲用と調理用にも使う。水質の良否は、鉄化合物に起因する臭いで判断すると聞く。

バー氏の案内で農家を回り、井戸水を採水する。同時に黒澤さんが、携帯用の測定機器で水の pH と ORP (酸化還元電位) を測定する。採水した水は土地資源環境学部中央実験室に持ち帰り、硝酸とアンモニウムイオン濃度を測定する。水質調査はツューリエト村から始め、2軒目までをツューリエト村で行い、3軒目からイエングー (Yen Nguu) 村へ移る。合わせて6軒の農家から井戸水を採水し、そのうち2軒は社システムにより配給された井戸水、4軒は私有システムの井戸水を採水する。農民の氏名と合わせ、各農家での採水状況は次のようである。

1 軒目: Nguyen Van Dang, 私有井戸水, 深さ20m

2 軒目: Nguyen Truong Giang, 社配給井戸水

3 軒目: Le Van Thuy, 私有井戸水, 深さ25m

4 軒目: Le Van Si, 私有井戸水, 深さ25m

5 軒目: Le Van Bao, 私有井戸水, 深さ36m

6 軒目: Dung Trung Dinh, 社配給井戸水

9時過ぎから始めて、10時30分頃には6軒の農家での井戸水の採水と測定を終える。2002年10月のフードン社とフーラム社の井戸水採水では、農家毎に行く先々で茶を供されたが、タムヒエブ社での採水ではそのような素振りも見えなかった。採水での訪問を、人と人との繋がりととしてよりも事務的行為とみなす意識が支配的なのであろう。

農家の生活と副業

タムヒエブ社で採水に回った6軒の農家のうち5軒では、副業として、程度の差はあれ、小売業あるいは飲食業を営んでいた。タムヒエブ社はハノイ市中心部に近く、その経済活性化の恩恵に与っているように思われる。1軒目と2軒目の農家の在るツューリエト村はタムヒエブ社の中心地であり、1軒目の農家は比較的手広く小売業を営んでいるようで、家の前部が店になり、衣類（生地、男性用ズボン、女性用下着）、靴、時計、文具類、蛍光灯等を販売していた。商品の配列にも配慮が感じられ、店に入っただけの右側の壁に、外から最も目に付く所に、幾つもの大きな掛時計が掛けられていた。店から上がって小間を挟んで食堂があり、そこで黒澤さんとハイさんがpHとORPを測っている間、食堂の設備を観察する。テレビ（Samsung製）、冷蔵庫（Daewoo製）、電子レンジ（LG製）、トースター、浄水装置、扇風機、食器棚があり、流しが付いて、中央にテーブルと6脚の椅子が置かれ、かなり裕福な生活レベルにあるように見て取れた。Samsung, Daewoo, LGはいずれも韓国の企業である。小間には2階へ登る階段が見えた。9時33分2軒目の農家へ移動する。2軒目の農家では、軒先の日除けに“Nha Dat, Bia Hoi Viet Ha”の文字が見えた。この農家では飲物と菓子、乾燥食品を売っていた。飲物は、台の上にハノイビール、コカコーラとミリンダの瓶が並べられ、菓子と乾燥食品は、少量がガラスケースの中に置かれて売られていた。小売の場所に続いて階段が2段あって食堂になり、テーブルが3つと数脚の椅子が置かれていた。

2軒目の農家の軒先の日除けに書かれていたNha Datは土地の売買を意味し、日本流に言えば不動産業を営んでいることを意味する。越南では、ドイモイ（1986年）後の土地政策の変更により農地の実質的な私有が認められ、土地の交換、委託、賃貸、相続、担保の権利が認められるようになった。1990年代以降、ハノイ市中心部の周辺では、市場経済化の進展につれて土地の需要が増し、需給関係が逼迫し、そのため土地の値段が高騰し、いわゆる土地バブルの状況になりつつあるようである。後で車の中でハイさんに聞いた話では、タムヒエブ社はここ7年の間に発展し、空いている農地を求めてNha Datが暗躍する。その一方で、経済発展やそれに伴う土地利用の変化による水質汚染が懸念される。その点から言えば、タムヒエブ社の土地利用・農業生産について、社のリーダーから

聞けなかったことは、逆には残念であった。

小さな橋を越えてイエンギュー村に入り、9時55分タムヒエブ社の給水所（Commune Pumping Station）の横を通る。3軒目の農家では、コンクリートの床の広間の軒先で少量の物が売られ、子供が天井近くに置かれたテレビに脇目も振らずに見入っていた。テレビが高く置かれていることから、仕事を終えた農民が近くから集まり、寛ぎながらテレビを見て楽しんでいる情景を想像する。床にはビリヤードの台が置かれ、ささやかな娯楽を提供する。一隅に木製のベッドがあり、その上に蓆が敷かれ、毛布が掛けられていた。井戸水を汲み上げる電動ポンプのスイッチの横に洗濯物乾燥機が置かれ、中は洗濯物で詰まっていた。3月のハノイのこのような天候では、洗濯物は外では乾かず、乾燥機は重宝されるかもしれない。4軒目の農家は雑貨屋を営み、その後ろに3階建ての新築の住居を見る。3階部分はバルコニーになり、新築の家の横には、狭い通路を挟んで、昔ながらの赤瓦の平屋の家。この農家では、鳴き声だけで姿は見なかったけれど、家の背後の小屋で豚を飼っていた。5軒目の農家は2階建てで、家の表で乾燥食品を売っていた。6軒目の3階建ての農家では、塀に囲まれた庭先で宅配給井戸水を採水しただけであった。調査した農家に限らず、イエンギュー村では、新築の3階建ての豪華な農家が少なからず見えた。

村の日常

図9～12は、朝タムヒエブ社に着いて、ツューリエト村で、ハイさんが社の関係者を呼びに行っている間、車を降りて辺りを見て回った時に撮った写真である。図9は、通りでわずかばかりの野菜を売る。キャベツ、コールラビ、香草、ネギなどが売られ、自転車の人がちょうどネギを買っているところであった。右側に衣料品店が見える。図10は、プロパンガス店の店先での肉売りである。粗末な台の上に置かれた肉は、その日の午前中には売り切れるのであろう。図11では、家の軒先で果物が売られ、店番は珍しく男である。スイカ、カンキツ、ブドウ、star apple（milk fruitとも呼ばれ、和名はスィショウガキ）等が見える。図12はカフェである。早朝で客はまだ見えないけれども、店先のケースには具入り饅頭が売られ、カラオケも営業しているようである。

図13～15は、イエンギュー村で、採水のため農家から農家へ移動する間に撮った写真である。図13と14は、村の通りに立つ小さな朝市である。雨で濡れた通りに、



図9 Tam Hiep 社 Tuu Liet 村, 野菜売り.

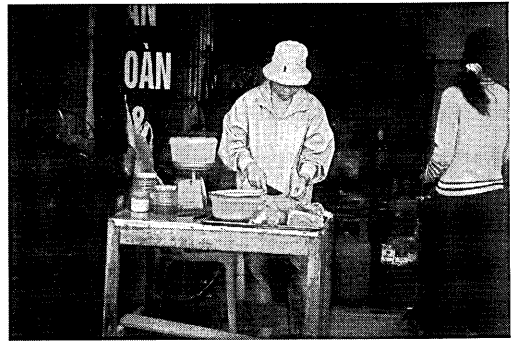


図10 Tam Hiep 社 Tuu Liet 村, 肉売り.

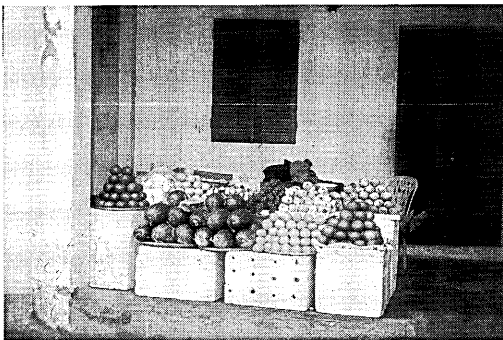


図11 Tam Hiep 社 Tuu Liet 村, 果物売り.



図12 Tam Hiep 社 Tuu liet 村, カフェ.



図13 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 朝市 (1).

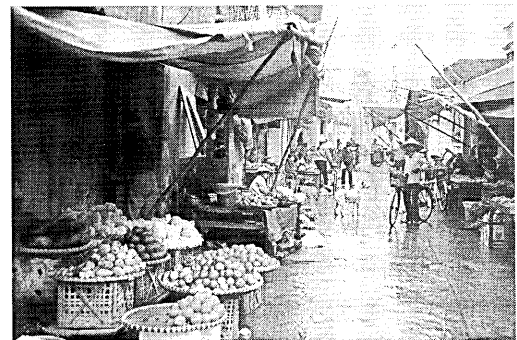


図14 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 朝市 (2).



図15 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 小売り.

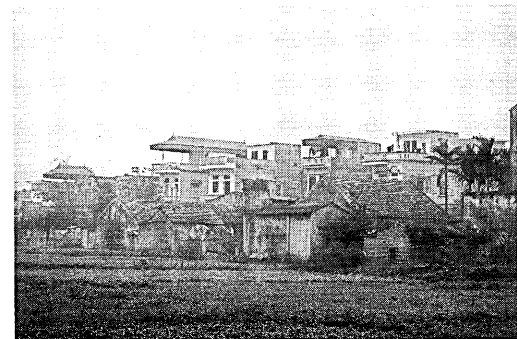


図16 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 農家.

一定の間隔を置いて場所を占め、籠に野菜（コールラビ、タマネギ、ジャガイモ、香草など）あるいは果物（スイカ、カンキツ、リンゴなど）を入れて、あるいは台の上に肉を置いて売る。売るのは老若を問わず女性である。越南国旗を掲げているのは、村の共産党委員会あるいは人民委員会の建物かもしれない。図15は農家の副業としての小売りであり、この店ではパン、菓子、飲物、乾燥食品が売られ、女性が店番をする。図16はイエンギュー村で見た住家で、新築された2階あるいは3階建ての農家とその背後に伝統的な赤瓦の平屋の農家が小さく見える。紅河デルタの農村で、2階建て、3階建ての農家を見るようになるのは2000年以降である。冷蔵・冷凍施設、保冷輸送システムが未発達な越南では、生鮮食料品はその日のうちに運ばれて市街域の常設市あるいは村の青空市で売られ、その日のうちに消費され、売上は農家主婦の重要な副収入になる。商業施設が増えていき、その規模が拡大したとしても、両者は共存していくだろうと思われる。

イエンギュー村で3軒目の農家から4軒目の農家への移動の途中に、タムヒエブキンダーガーデンに気付き、軽く訪問する。門から園内に入り、我々が近づいて行くと、3〜4歳と思われる幼児が、声を揃えて大きな声で歓迎の挨拶をしてくれる。保母さんの指導で、日頃からそのように訓練されているのであろう。後でもう一度門の外から覗いた時には、10時半のおやつ時刻で、子供達におやつが配られていた。日本の幼稚園・保育園では、常習的に送迎バスでの送り迎えだが、タムヒエブキンダーガーデンでは、送り迎えは子供だけなのかそれとも親が付き添うのだろうか、あるいは保母さんが迎えに行くのであろうか。

土 地 利 用

10時30分頃には井戸水の採水とpH・ORPの測定を終え、続いて表面水（農業用溜池・水路）の採水と測定に移る。しかし、道が細くて車ではその場所まで近づけず、バー氏のバイクに黒澤さんとハイさんが乗り、3人だけで行くことになる。彼らを待つ間、久保さんと、村の道路の両側の土地利用を見る。イエンギュー村では、セリとカンコンとクレソンの湛水栽培が区画を区切って行われる（図17〜19）。少し高い所では畑作が行われ、ダイコンとブラシカともう一つ別の野菜の栽培を見る（図20）。久保さんと二人でそのような土地利用を眺めている間、イエンギュー村では、水稻栽培を止めてセリ/カンコン/クレソンの年間栽培に切り換えたのではないかと憶測したが、夏稲の栽培は

行われると後でハイさんから聞く。即ち、6〜9/10月に夏稲を栽培し、それ以外の期間は野菜を栽培する。しかし、1年中野菜を栽培している畑もあるようで、そうすると、昨日の国立土壤肥料研究所ヒエン所長の話からすれば、極めて多量の化学肥料の施用がうかがわれる。

タムヒエブ社での井戸水と表面水の採水を終えて、黒澤さんから聞いた話では、イエンギュー村には燐酸肥料製造工場とバッテリー製造工場がある。このことは表面水採水の過程で分かったことで、名称はVan Dien phosphate factoryとVan Dien battery factory。両工場とも国営企業で、それぞれ1957年と1959年の創業であり、45年以上の製造歴をもつ。これら二つの製造工場はいずれもトーリック（To Lich）川に排水し、そしてそのトーリック川の水を、イエンギュー村（あるいはタムヒエブ社全体かもしれないが）は農地への灌漑に利用している。そうすると、少なくとも表面水のかなりの程度の汚染が懸念され、その影響が地下水（井戸水）にも及んでいる可能性が考えられる。このような状況であれば、タムヒエブ社の水質の測定で異常な結果が見られたとしても、それは紅河デルタにおける特異なケースとして扱うのが適切かもしれない。

Van Phuc 村で

12時にタムヒエブ社での採水と測定を完了し、ヴァンフック（Van Phuc）村まで昼食を取りに行く。ヴァンフック村（ハテイ（Ha Tay）省ハドン（Ha Dong）県）に入ると、道路の横に春稲の移植された水田が広がる。ヴァンフック村で昼食に入ったレストラン、その名称は見え、店の看板には“Bia Hoi Viet Ha”の表示があるのみ。レストランの名称が書かれていないのは日本人の私にはやや奇異に感じられるが、ハイさんの言では、“Bia Hoi Viet Ha”の表示だけで充分とのことで、恐らくその店にBia Hoiがあることが分かればそれで充分なのであろう。因みに、ハノイにはBia Hoiの製造工場が2つあり、一つはBia Hoi Viet Haで、もう一つはBia Hoi Ha Noi。昼食の料理（図21）は、スープを含め牛肉料理数種、揚げし豆腐、カボチャの蔓とトマトの煮物、最後に焼飯（fried rice）。ハイさんの話では、牛肉料理か鶏肉料理か魚料理かによって、付け合せる生鮮野菜（香草）が違うとのこと。肉質に合わせて取り合わせるのであろう。ビールは看板にあるようにBia Hoiで、ビール製造工場から直送された、日本流には生ビール。運転手を入れ

5人でひとしきり飲食歓談する。午後からは曇りだけと雨は上がる。

昼食を終えて、同じヴァンフック村の、絹製品を製造・販売する絹の街を訪れる。ここへはこれまで何度となく来ている。絹の街には午後1時半に着き、3軒の店に入り、合わせて415,000VN ドンのショールとスカーフを購入する。枚数では10枚。そのうちの1枚は、ハイさんからの贈り物。3軒目の店はミリンシルク(My Linh Silk; 美領絹) と言い、オーナーは若い女性(図22)で、自分の名前をそのまま店の名前に使っているのであろう。ここで最も多くのスカーフを買う。買物を終えて、絹の街への通りの入口の、昔ながらの喫茶店で暫しの越流喫茶を楽しんで心を宽げる。2時25分帰途に着き、2時45分ハノイホテルに着く。ハドン県はハノイ市に隣接し、ハノイ経済圏の拡がりにつれてその一部に取り込まれていくことであろう。人の心が追いつかぬまま、全てが急速に変わりいく。

旧 市 街

午後5時半に3人でホテルロビーに集まり、45分タクシーに乗って旧市街へ向かい、6時5分ハンガイ(Hang Gai) 通りで降りる。ハノイホテルからここまでのタクシー代は36,000VN ドン。タクシーのメータ表示には千の位以上の数値のみ表示される。ハンガイ通りは、旧市街の中でも外国人相手の土産物店が最も多い通りで、そこを歩きながら数軒の土産物店を覗き、久保さんが何がしかの土産を買い、ハノイで百年以上続いてフォーを売っていると言われる、黒澤さんお勧めのギア・チュエン(Gia Truyen) にフォーを食べに行く。外観は小さな汚い店ながら評判の高い店らしく、私も初めて来たが、他のフォーの店より高い値段にも拘らず、席待ちの状態であった。開店は午後5時で、外国人観光客より越南人が多く来店していることも、おいしいフォーを食べさせることの現れであろう。1杯12,000VN ドンのフォーボーを食べ。人工調味料を一切使わないフォーはさすがに美味しく、汁まで残さずに食べてしまう。夕食はフォーだけで済ませ、ハノイ滞在中昼食と夕食でビールを飲まなかったのは、この日の夕食だけであった。

旧市街を歩きながら、量的にやや寂しかった夕食の足しに、道端で売られている具入り饅頭1つ4,000VN ドンを買い、その場に座って、蒸されて熱い饅頭を食べ。饅頭を売るのはやや中年の女性(図23)で、彼女も個人経営ながら立派なオーナーである。旧市街、36通りと言われるだけのことはあって縦横に道が走り、

そこここで黒澤さんが道を尋ねながら、タンロン水上人形劇場(Thang Long Water Puppet Theater) に向かう。それでも7時半には着き、8時の開演までまだ少し時間があったので、劇場の近くを歩いて見て回る。サンダルが歩道にまで並べて売られていた。日本では見なくなって久しい商魂である。夕刻、還剣湖の亀塔がライトアップされていた。

水 上 人 形 劇

水上人形劇は、紅河デルタ農村において農閑期の唯一の娯楽として広く行われ、日常生活の中に組み込まれていた。紅河の氾濫から村を守るために造られた輪中を地形的基盤として、閉鎖社会を形成していた紅河デルタ農村において、水上人形劇は、演じられる演目を通して人心を結集し、儒教の精神を広め、村を守る作用を有していたと想像される。しかし、情報化社会の到来とともに農村の閉鎖性が取り除かれ、経済の発展による人々の往来が頻繁になり、更に娯楽が多様化したこともあって農村で行われることは希になり、今ではハノイの観光コースの一つとして、外国人観光客を対象として演じられることが主流となってきた。私がタンロン劇場で水上人形劇を見るのは、2001年9月、2002年10月に次いで3度目になる。今ではもう見られないが、文廟の本堂の横に野外演技場があって、そこで1997年4月に一度見たことがある。

タンロン水上人形劇のプログラムを、会場の入口に置かれていた日本語・ハングル・中国語で書かれたパンフレットから引用すると次のようである: 1. 祭りの旗上げ; 2. テウさんのナレーション; 3. 竜の踊り; 4匹の火を噴く竜の競演; 4. 水牛とフルート吹く子供; 5. 田植え作業; 6. カエル捕り; 7. アヒル農法と狐狩り; 8. 釣り; 9. 凱旋帰郷; 10. 獅子舞; 11. 不死鳥(鳳凰)の舞い; 12. レロイ王、ホアンキエム湖の伝説; 13. 水遊び; 14. ボートレース; 15. 獅子のボール遊び; 16. 仙女の舞い; 17. (竜, 獅子, 鳳凰, 亀) 4匹の競演。全17話、毎回同じプログラムであるが、一つ一つが短く、越南には珍しいコメディ仕立てのストーリーで、水に関わるものが多く、言葉は分からなくても、稲作民の我々には共感でき、充分に楽しめる。しかし、観客の半数以上を占める欧米系の人達には、それほど理解できないのではないと思う。

1回の水上人形劇の上演時間は1時間で、それが1日数回演じられる。演じる人は全員水に浸かりながらの演技であり、17話が終わって全員が挨拶に出てくるが、1日演じると疲れるだろうと同情する。我々の人

形劇は午後8時に始まる。座席はほぼ満席で、フランス人の老人が多いように見た。彼らの中には、抗仏戦争（第一次インドシナ戦争）に参戦した退役軍人もいいるのではなかろうか。第一次インドシナ戦争は、1954年5月ディエンビエンフー（Dien Bien Phu）の戦いで、越南の勝利で終わった。第一次インドシナ戦争の戦後処理のための協議（パリ会議）で、西側諸国の思惑から越南は南北に分断され、悲惨な越南戦争へと突入する。9時までちょうど1時間の観劇で、9時に劇場を出て、タクシーでハノイホテルに帰る。9時20分に着き、40,000VN ドンを払う。水上人形劇の観劇代1人40,000VN ドンはフイが払ってくれ、入場券を用意してくれた。

Bat Trang 観光

3月18日（金）、朝6時に起床。路面が濡れ、今朝も、昨日ほどではないにしても薄く霧がかかる。ハノイホテルの道向かいに中学校があり、窓から見てみると、6時半過ぎには、子供達が赤いスカーフを首に巻いて、歩いてあるいは自転車に乗って登校する。3月のハノイは初めての訪問だが、この時期のハノイ及び周辺では、夜雨が降り、それが午前中まで残り、午後は曇りかあるいは運が良ければ陽が射してくる。このような状態が3月一杯続き、数回の激しい風雨を経て、季節は一気に乾季から雨季に変わる。8時半にハイさんの同乗を得てハノイホテルを出る。途中、運転手に頼んで2000年に復元されたハノイ城北門の横を通る。ハノイ城（タンロン城）には、北、東、西にそれぞれ1つ、南に2つの門があり、そのうち北門だけが復元されている。9時20分にハノイ農業大学へ到着し、そのまま、ハイさんの案内で、久保さんとバッチャン（Bat Trang）観光に行く。黒澤さんは、昨日採水したタムヒエプ社の水試料の硝酸とアンモニウムイオン濃度測定のための打ち合わせのために、土地資源環境学部中央実験室に残る。ハノイ農業大学からバッチャンまでは車で十数分の距離にあり、構内を出てバッチャンまでの間、春稲の移植を終えたばかりの水田が道の両側に広がる（図24）。早苗が風にそよぐ様はアジアモンスーン地域の原風景であり、心の共感を覚える。紅河デルタでは、春稲の移植は2月半ばに始まり、3月半ばまで1ヶ月程続くと聞く。

9時37分にバッチャンに着き、10時55分まで、ミンハイセラミック（Minh Hai Ceramic）とヒュオンスアンセラミック（Huong Xuan Ceramic）の2軒で陶器を見て回り、購入する。バッチャンは、私自身

は4度目だが、来る度に心を動かされる陶器を見つけ、購入している。今回の購入代金は合わせて142,000VN ドン。ミンハイセラミックは5階建てで、上層階で陶器の製造工程や絵付け作業を見ることができる。頼めば轆轤回しの実演ができ、日本からの卒業旅行の女子学生4人連れが実演しているのを眺める。彼女等はその後絵付けに挑戦したのであろう。そうして階段を降りて来て、2階と1階で、陳列された陶器を購入する仕組みになっている。陶器の絵付けをしているのも、売場で働いているのも、全て二十歳前後と思われる若い女性で、売場の女性は、片言の日本語を話しながら大いに愛嬌を振りまいていた。最初ミンハイセラミックに入り、気に入って赤い絵柄の湯呑を買ったが、次に入ったヒュオンスアンセラミックでは同じ物が半分近い値段で売られていた。些細な事ではあるが、市場経済の浸透を思う。11時10分にハノイ農業大学に戻り、運転手のトンさんに、13日の空港迎えから明日19日の空港送りまでの車借上げ代金として、3人で295万VN ドンを支払う。ノイバイ空港への迎えと送りがそれぞれ25万VN ドン、1日の代金がハノイ市内であれば40万VN ドン、市外へ出れば45万VN ドン。1日の借上げ代からすれば、空港への送迎の費用が割高のように感じる。

文 廟

11時40分にハイさんが同乗してハノイ農業大学を出る。今回の訪問でも、ハノイ農業大学はこれが見納めである。12時10分にハノイ市内の昼食の店に着く。店の名前はヒュエン・ズン（Huyen Dung）と言い、ドライフォー（Dry Pho）を食べさせてくれる。ドライフォー、日本流に言えば焼きうどん。ハノイビールを飲み、肉料理を3皿取り、ドライフォー5皿で、合計180,000VN ドン。用事があると言うハイさんを途中で降ろし、文廟（Van Mieu）に行く。文廟は1070年創建の孔子廟（現在の建物は19世紀の再建）で、越南最初の大学として知られ、多くの人材を輩出してきた。文廟はハノイ観光のスポット中のスポットで、ハノイに来る度に同行の人を案内して来ている。文廟の拝観料は1人5,000VN ドン。越南人は、拝観券売場の表示では1人3,000VN ドン。前回訪問の2003年11月は、外国人でも1人2,000VN ドンだったから、大幅な値上がりである。文廟には12時50分から13時30分までいて、文廟門（図25）、庭園、奎文閣（科挙の合格者の碑があり、82の碑に1,306名が刻まれる）（図26）、本堂（孔子を始め孟子、老子等5体の像を祀る）、國子監（伝

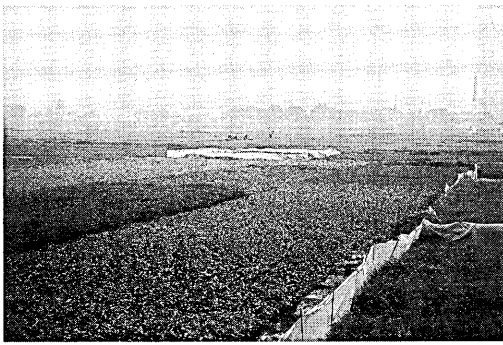


図17 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 湛水栽培 (1).

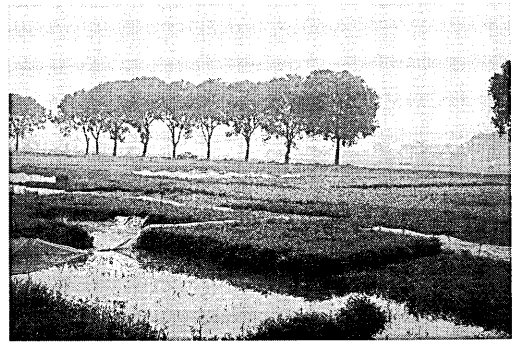


図18 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 湛水栽培 (2).

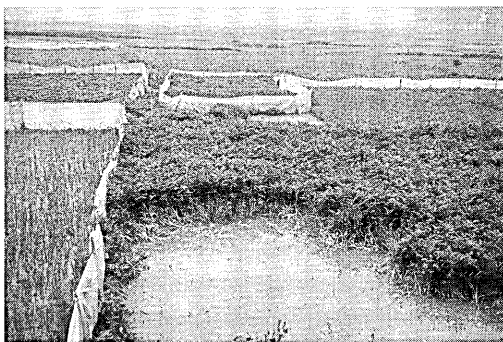


図19 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 湛水栽培 (3).



図20 Tam Hiep 社 Yen Nguu 村, 野菜作.

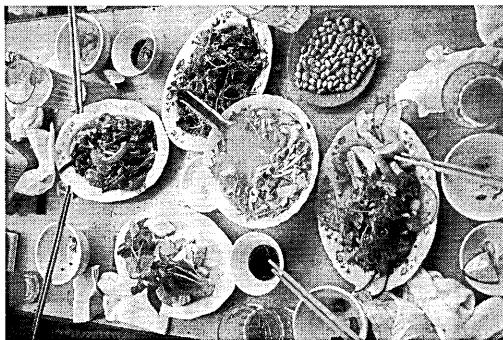


図21 Ha Tay 省 Van Phuc 村, 昼食の料理.



図22 Ha Tay 省 Van Phuc 村, 絹製品店オーナー.



図23 Old Hanoi, 具入り饅頭販売オーナー.

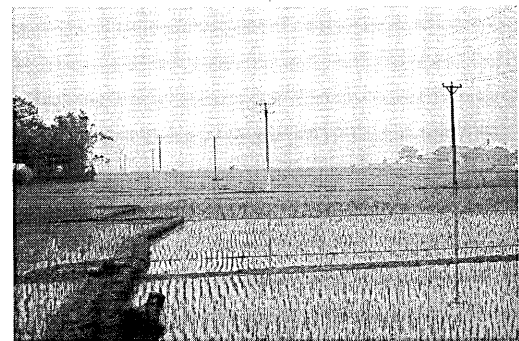


図24 Gia Lam 県, 春稲の移植田.

統王朝の学問所)と見て回る。図25には、「文廟門」と左横書きの漢字が見て取れる。

Big C Supercenter

文廟を見て、ハノイ市のタインスファン (Thanh Xuan) 区に、フランスの資本で2005年の2月、テト (Te; 旧正月) の頃にオープンした Big C スーパーセンター (Big C Supercenter) を見に行く。タインスファン区は、ハノイ市中心部ではその南西部に位置し、Big C スーパーセンターへの途中、高層建築物の建設ラッシュと、一方で広大な空地が広がっているのを見る。ハノイ市中心部では、周辺部以上に農地の壊廃と土地所有の集中が進んでいることを思う。黒澤さんの言では、“Thanh Xuan” は漢字では「青春」と書き、日本では若さのプラス面を言うが、越南では未熟とか青二才とか、むしろマイナス面を強く意味するようである。Big C スーパーセンターは大型の商業施設で、そこだけが異次元の空間であった。日本の郊外型スーパーマーケットと同じ建物構造、販売システムにあるようで、とても越南にいるとは思えず、日本のスーパーマーケットで買物をしているような錯覚にすら陥る。さすがに來ている人は若い人が多く、オープン間もないことの珍しさも手伝ってか、かなりの客入りのように見た。建物1階は専門店階で、まだ入っている専門店が少なく、だだっ広い空間のまま残されている。建物の表側は広い駐車場で、裏側は駐輪場になっている。都市部でも公共輸送が未だ整備されていない越南では、この種の商業施設には駐輪場は必需である。

階段の無い、緩やかなスロープのエスカレーターで2階に上がると、マーケット階で、食料品、乾物、嗜好品、日用雑貨、生活用品、電気製品等が売られる。日本のスーパーマーケットでの販売構造・商品配置に見るのと同じく、生鮮野菜、肉類、パン、果物、調理食品 (揚げ物)、加工食品、冷凍食品、乾燥食品、インスタント食品、米、缶詰、緑茶・紅茶・コーヒー、清涼飲料水、アルコール類、衣服 (衣類)、寝具、菓子類、人工調味料、靴、玩具、バッグ、スポーツ用具、自転車、電気製品が、エスカレーターを上がって売場に入っすぐの所で食料品が売られ、乾物・嗜好品・飲料物のコーナーへと続き、衣料品が置かれ、一番奥で玩具・スポーツ用具、電気製品が売られる。これらの物が、区画に分けられて、台に並べられ、ケースに入れられ、棚に置かれ、あるいは飾られて売られる。区画毎に販売品の表示札が下げられている。肉が切り分けてパックに詰められ、米が袋に入れられて、服がハンガーに掛け

られて売られる。日本語で書かれた酒、焼酎、インスタントラーメンも置いてある。米の袋にコシヒカリと書かれている。これらのことを広告用紙の裏にメモしながら見て回っていたところ、その途中もずっと目を付けられていたと思うけれど、電気製品売場近くになって、一人の男が近づいて来て、ボールペンを仕舞うように手振りで示す。この国の監視体制/システムの怖さは充分知っており、その後はメモを取らずにただ見て回る。レジの女性は全てアオザイ姿で、その色とりどりのアオザイが接客する様を売場の外のベンチに腰掛けて眺めていた。レジの女性のアオザイ姿と果物コーナーに熱帯果物を見たのが、日本のスーパーマーケットとの違いであった。

Big C スーパーセンターでは午後1時45分から2時35分まで見て回り、わずかな買物をする。売場の華やかさとは裏腹に、買った品物の質は悪く、帰国後1回着ただけでほつれてしまった。2時50分ハノイホテルに帰着する。途中から雨になり、午後はずっと雨模様の天気だった。夜になっても小雨が降り続いていた。屋食のドライフォーの油が腹に残り、不快感に苛まれる。意識的に吐いて体調を整え、夕食に備える。食への飽くなき執念である。夕食は、当初ハノイホテル近くの日本料理店 New Sake を考えていたが、最後の夜ということで飲送晩餐会となる。午後6時小雨の中を近くのマーケットまで出かけ、リョクトウ菓子5箱を、1箱4,500VN ドンで購入する。土産ばかりが増える。

トゥリエム県に、2003年スーパーマーケットができていて、メトロ (Metro) という名称で、前回2003年11月に、ノイバイ空港からハノイホテルへの途中に初めて見て、一度は出かけてみたいと思っていた。しかし、メトロは会員制と聞き、Big C スーパーセンターへ行った次第である。Big C スーパーセンターは、恐らくメトロにしても、ハノイではまだ別世界である。しかし、市街域周辺部への集合住宅の建設が進み、それら集合住宅へ若い人が住むようになると、その利便性・快適性から、これらスーパーマーケットは急速に拡がり、市民権を得ていくだろう。そして、市の中心部は伝統との間でその姿を残しながら、周辺部の光景は一変するだろう。変わりいく紅河デルタである。しかし、それでも私はドンファン市場の喧騒と雑踏と活気を好む。若い人達が華やかさに憧れ、ホー・チ・ミン主席の国と民族を思う心と建国の過程と精神が、彼らから忘れ去られていくことを恐れるのみである。

歓送晩餐会

午後6時半ハノイホテルにヒュー・タインさんとフイの出迎えを受け、ヒュー・タインさん同乗のタクシーでレストラン (Nha hang) ホイアン (Hoi An : 会安) へ向かう。フイは、彼のオートバイ (Xe Mai) で行く。出る前二人から大量の土産がくる。ハイさん、チャからの土産もあり、持ってきた土産の倍以上を貰って帰ることになりそうである。久保さんは、午後のBig C スーパーセンターで、旅行バックを1つ新たに購入する。私はそのために空のリュックサックを持ってきている。ホイアンは越南中部の町で、中世から近世にかけて日本人街があった所で、レストランホイアンを場所を選んでの、ハイさん、ヒュー・タインさん、フイ、ハイ君の招待による歓送晩餐会である。彼らの細やかな心配りに感謝である。総勢7人、生ビールで乾杯し、ワインを1本空ける。生ビールはBia Hoiとは明らかに違い、越南にも生ビールがあったのだと感心する。しかし、越南のじっとりとした暑さには、ややさっぱりとしたBia Hoiが向くかもしれない。料理は、先ず野菜スープ。続いて、カンコンの炒め物、カボチャの蔓の炒め物 with ガーリック、ポーク with フライドポテト (ポークは香辛料と混合して炒める)、揚げ出し豆腐、トリ (骨付き鶏肉を蜂蜜と加熱する) (図27)。食事中何度となく生ビールあるいはワインで乾杯する。最後はフライドライス of special combination. 越南側は、いずれも土壌学研究室に籍を置いたことのあるあるいは現在置いている、気の置けない連中で、料理を楽しみ、会話を楽しむ。

十分に歓談飲食し、レストランの前で、黒澤さん、ハイさん、フイ、ハイ君と別れて、ヒュー・タインさん同乗のタクシーで、午後10時にはハノイホテルに帰る。黒澤さんとハイさんは、夜行の急行列車でラオカイ (Lao Cai) まで行き、そこからサパ (Sa Pa) に向かう。19日朝サパに着いて、現在続行中の土壤侵食実験のデータを集め、19日夜のラオカイ発の急行列車で20日早朝にはハノイへ戻るという強行軍である。ホイアンの前で彼らと別れる時、ややほろりとした気持ちになる。ハノイの最後の夜である。部屋の窓から外を眺め、暫し感傷に浸る。テレビからは越南の歌が流れてくる。天気予報では明日も雨だった。

Ho Chi Minh 主席旧居

3月19日 (土)、朝5時半に起床。熱いシャワーを浴び、荷物を纏める。ハノイは、今日も朝から細かな雨

である。週の半ばから、英字新聞 "Viet Nam News" が部屋に配られるようになる。客が減って回ってくるようになったのであろう。前々回 (2002年10月) に比べて紙数が倍以上に増えている。しかし、残念ながら、日本についての記事はほとんど見ない。7時半から久保さんと二人の朝食。今日まで6回の朝食で、いつも真っ先に取るのは粥。それに塩気の効いたゆで卵とザーサイを入れる。日によって、麺、パンあるいは中華饅頭の類を食べ、各種肉料理と野菜、卵料理 (目玉焼きあるいはオムレツ)、果物 (スイカ、マンゴー、ウリ、パイナップル、ドラゴンフルーツ) を食す。飲物は水とオレンジジュース、それにコーヒー。それらを取ってきて窓側のテーブルに並べ、椅子に座って真っ先に食べるのが粥。粥が、成人習慣病の身には一番である。

9時にホテルのチェックアウトを済ませ、カードで6日分の宿泊費276USドルを支払う。今日は休日、チャとハイ君の案内を得て観光に出かける。9時10分にバーディン (Ba Dinh) 区に着く。ここは、現在の越南の政治・行政の中心である。1945年9月2日、ホー・チ・ミン (Ho Chi Minh : 胡志明) 主席がヴィエトナム民主共和国の独立を宣して以来、ヴィエトナム共産党政権・官僚機構の中枢がここに置かれる。ホー・チ・ミン廟はそのシンボリック的存在で、1969年9月2日に亡くなったホー・チ・ミン主席の遺体を安置する。ホー・チ・ミン廟には、私はこれまで2度入っている。ホー・チ・ミン主席は共産主義者である以上に民族主義者であった。生涯独身を通し、その質素な暮らしの中で、全ての活動を越南民族の解放に捧げた。公平無私な態度で人々に接し、生きる勇氣と希望を与え、独立と自由の尊さを説いた。彼ほど、越南の人々は勿論、世界中の人々から今でも敬愛される政治的指導者はいない。

ホー・チ・ミン廟へは、外国からの観光客と越南各地からの老若男女が、それぞれに列を作って並び、入廟の順番を待っていた。1時間以上の待ち時間と聞き、ホー・チ・ミン廟へ参るのを諦めて、ホー・チ・ミン博物館へ行く。9時25分にホー・チ・ミン博物館、ここも既に数度来ている。博物館への入館料は越南人と外国人で変わらず、1人5,000VNドン。ホー・チ・ミン主席の生誕、フランスへの渡航、民族解放運動、越南戦争、その死までのことが、主席がその時々に残した言葉と関連の展示物でつづられ、写真を多用して紹介されている。休日ということで、先生に引率された、国内各地からの子供達の集団が目についた。

ホー・チ・ミン博物館を見て、10時5分ホー・チ・ミン主席の旧居へ回る。ホー・チ・ミン廟から流れて

来た人で込み合い、行列をなしての見学となる。入場料は越南人と外国人で変わらず、1人2,000VNドン。旧居は2度目だが、最初に来た2002年10月と比べて、ホー・チ・ミン主席が、1954年のディエンビエンフーでの戦いの後に住んだと言われる建物が新たに復元されていた。その建物は3部屋に分かれ、食堂には当時のままに食器が並べられ、ガレージには主席が愛用した車（プジョー）が置かれていた。ホー・チ・ミン主席がその晩年を過ごしたと言われる旧居は、ラッシュアワー並みの見学となった。旧居（レプリカ）は高床式で、その横には、主席が1969年9月2日に亡くなった建物（図28）と彼の医師団・看護婦が待機した建物（平屋でコンクリート製）があり、下が地下壕になっている土盛り（図29）があった。地下壕では、越南戦争の最中会議が開催されていたと聞く。ホー・チ・ミン主席が亡くなった9月2日は、彼がバーディン広場でヴィエトナム民主共和国の独立宣言を行った日と奇しくも同じ日で、それから24年後であった。

ホー・チ・ミン主席の旧居を出て、公園内を歩いて、その一角に鎮座する一柱寺（Chua Mot Cot）に詣で、10時50分バーディンを後にして、紅河の畔に在る歴史博物館へ行く。歴史博物館も過去に2度来ており、ここにせよ、ホー・チ・ミン博物館にせよ、昨日の文廟でも、案内役のチャヤハイ君よりも数多く訪れている。チャヤ、「江頭先生はハノイ人ですから」という所以である。越南の官公庁は11時30分から昼休みで、歴史博物館も11時30分から13時まで昼休み休館となる。そのため、11時5分から30分までの25分間で、1階と2階の歴史展示物を駆け足で見て回ることになる。それでも、2階のチャンパの石像まで何とか見ることができた。歴史博物館は外国人の観光ルートから外れているのか、それとも時間帯が悪かったのか、参観者は我々だけであった。歴史博物館には、先史時代からヴィエトナム民主共和国成立までの多種・多様な展示品が、時代に沿って年代順に整然と展示されており、その苦難に満ちた越南の歴史の一端に触れることができる。

Quang Ba 湖畔での昼食と Thang Loi ホテル

紅河右岸の自然堤防上を走り、西湖（Ho Tay）地区に至る。西湖には周辺に幾つかの湖があり、その一つクアンバー（Quang Ba）湖（西湖の北）の湖畔に在るレストランフongエン（Phuong Nguyen；方原）に11時45分に到着、湖を見渡せるテーブルに席を取り、ここで昼食となる。レストランフongエン

（図30）は屋根を椰子の葉で葺き、吹き抜けになっている。この種の造りのレストランが、西湖及び周辺の湖の畔に数多く見られる。これらレストランの名物料理は湖で獲れるタニシで、香草の葉を入れて鍋で茹でたタニシ（図31）を、井に入れて出してくれる。ハノイビールを飲んで、タニシの身を専用の用具で取り出して食する。ビールが回り、ほろ酔い機嫌である。タニシの後には、モチ飯 with 揚げタマネギ、鶏肉料理、生のキュウリ（図32）。トリは蜂蜜と加熱し、頭部から脚まで丸ごと、それを切り分けて皿に載せて出してくれる。昨夕のレストランホイアンと同じ調理法であり、ハノイではポピュラーな鶏肉料理かもしれない。3月のハノイは全てがヴェールに包まれる。湖畔の2、3階建ての住宅が霧に煙って見える。12時40分まで充分に楽しみ、費用は彼らが払ってくれる。もてなしの文化は、ハノイを中心とした北部越南の特徴の一つであり、土産文化と同じく東アジアに共通する。

昼食を終え、西湖畔のタンロイ（Thang Loi）ホテルに立ち寄る。この日は越南でも日が良いとかで、ホテルでは二組の結婚披露宴が行われていた。タンロイホテルは、1985年12月末初めての越南ハノイ訪問で泊まったホテルである。その当時、ハノイで外国人が宿泊できる唯一のホテルだった。2回目にタンロイホテルを訪れたのは15年半後の2001年6月で、その時もチャの案内で立ち寄った。図33～46に、1985年12月と2001年6月に撮った、タンロイホテル及びホテル周辺の光景の写真を対比して示す。図33と34はホテル玄関、図35と36はホテルロビー、図37と38は湖上のホテルの部屋で、1985年12月はこのどこかの部屋で2泊した。図39と40は屋外プール、木が大きくなっている。図41と42はホテルの部屋から見た西湖の湖畔、図43～46はホテル前の湖周辺の光景である。1985年12月当時は、西湖の緑に満ちた環境の中でタンロイホテルだけが際立った存在であった。それから15年半、タンロイホテル自体はそれほど変わらず、ホテルロビーの質素なたたずまいと籐の椅子も変わらないまま、周辺の光景は大きく変わっていた。そして、西湖の水質が大きく悪化した。図47は、図41と42に対比される、2005年3月の、ホテル傍の西湖の湖畔の光景である。

ハノイ市市街域の拡がり

食後のコーヒーをということで、西湖周辺の湖の一つで湖畔のSteel Caféに入り、その3階で越南コーヒーを飲みながら、小雨に煙る湖を眺めていた。越南コーヒーは基本的に濃いのが、Steel Caféのコーヒーは



図25 文廟, 文廟門.



図26 文廟, 奎文閣.



図27 レストラン Hoi An, 晩餐会料理.

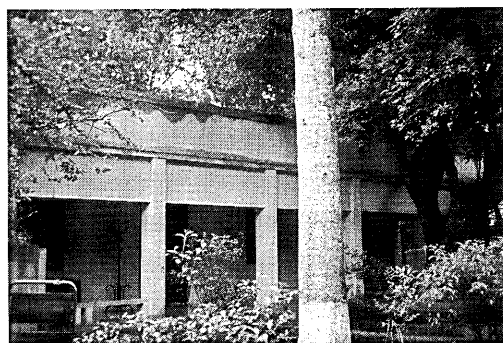


図28 Ho Chi Minh 主席旧居, 終焉の地.



図29 Ho Chi Minh 主席旧居, 地下壕の土盛り.



図30 Quang Ba 湖畔, レストラン Phuong Nguyen.

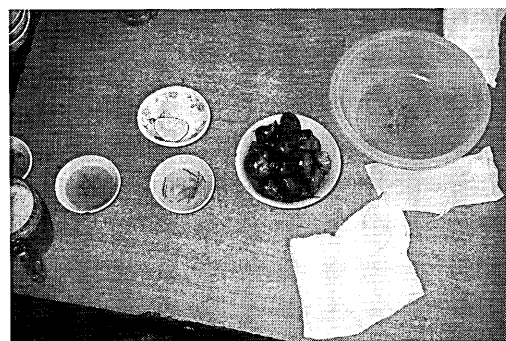


図31 レストラン Phuong Nguyen, タニシ料理.



図32 レストラン Phuong Nguyen, 昼食の料理.

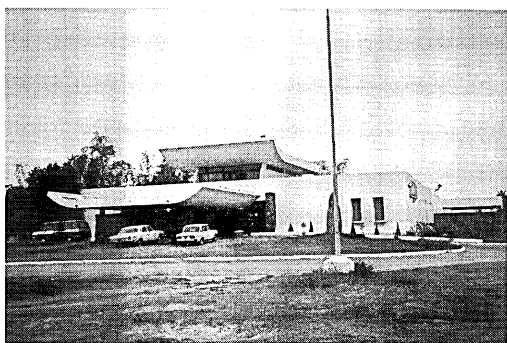


図33 Thang Loi ホテル, ホテル玄関, 1985年12月.



図34 Thang Loi ホテル, ホテル玄関, 2001年 6 月.



図35 Thang Loi ホテル, ホテルロビー, 1985年12月.



図36 Thang Loi ホテル, ホテルロビー, 2001年 6 月.

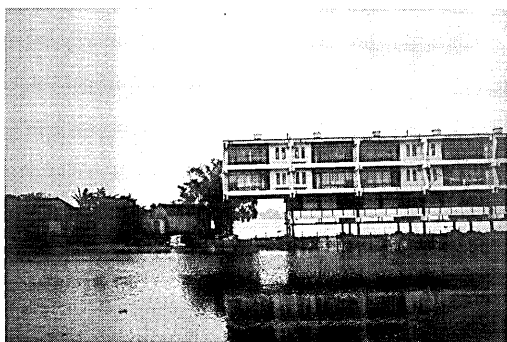


図37 Thang Loi ホテル, 湖上のホテルの部屋, 1985年12月.

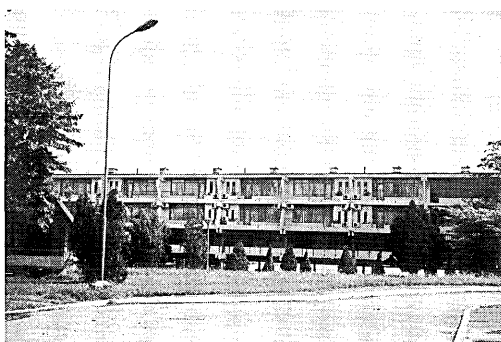


図38 Thang Loi ホテル, 湖上のホテルの部屋, 2001年 6 月.



図39 Thang Loi ホテル, 屋外プール, 1985年12月.

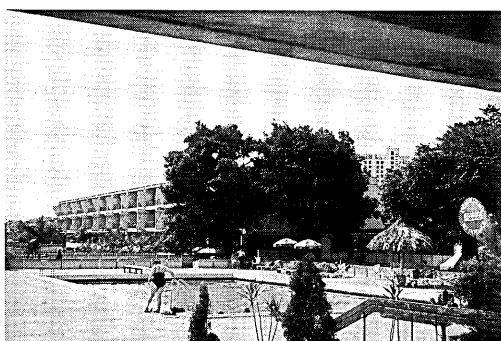


図40 Thang Loi ホテル, 屋外プール, 2001年 6 月.



図41 Thang Loi ホテル, 西湖の湖畔, 1985年12月.

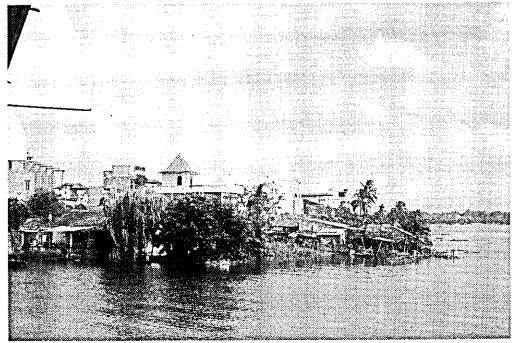


図42 Thang Loi ホテル, 西湖の湖畔, 2001年6月.



図43 Thang Loi ホテル, ホテル前湖周辺 (1), 1985年12月.

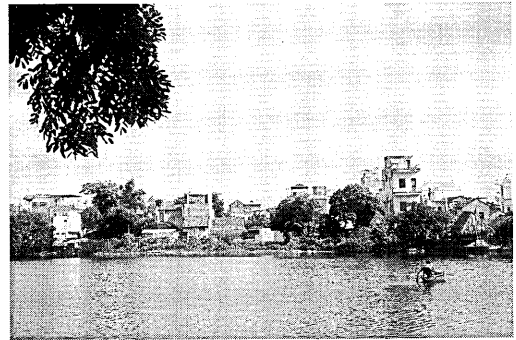


図44 Thang Loi ホテル, ホテル前湖周辺 (1), 2001年6月.



図45 Thang Loi ホテル, ホテル前湖周辺 (2), 1985年12月.

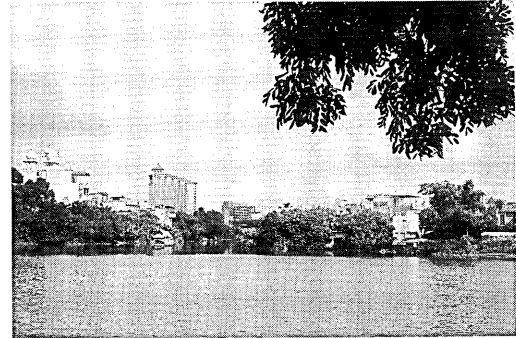


図46 Thang Loi ホテル, ホテル前湖周辺 (2), 2001年6月.



図47 Thang Loi ホテル, 西湖の湖畔, 2005年3月.



図48 Dong Ky, 旧街の通り.

特に濃く、液体というよりどろりとしたペースト状であった。コーヒーを飲み終えて、午後1時半頃、今日の最大の目的地であるドンキ（Dong Ky；同旗）へ向けて出発する。ドンキはバクニン省に在る木工家具の村で、2001年9月に一度訪れている。行く途中の車の中で、チャとハイ君から、ハノイ市の行政区分について聞く。

現在、ハノイ市には9つの区（Prefecture）と5つの県（District）がある。区はハノイ市の中心部（市街域）を形作る行政単位で、9つの区は次の通りである：Tay Ho, Cau Giay, Ba Dinh, Hoan Kiem, Thanh Xuan, Dong Da, Hai Ba Trung, Hoang Mai, Long Bien. このうちHoang MaiとLong Bienは最近新たにできた区で、Long Bien区は、ハノイ市街からチュオンズオン橋を渡った一帯で、市街域の拡大につれ、Gia Lam県から分離する形でできたと聞く。県は区を取り囲むようにハノイ市の周辺部に在り、次の5つがある：Gia Lam, Dong Anh, Soc Son, Tu Liem, Thanh Tri. このうちGia Lam, Dong Anh, Soc Sonの3県は紅河の左岸に位置する農村地帯で、Tu LiemとThanh Triは紅河右岸のハノイ市中心部の外側に在り、最近急速に都市化と人口集中が進む。

紅河に沿って南下し、チュオンズオン橋を渡ってロンビエン（Long Bien）区に入り、紅河左岸の自然堤防上を北上する。霧がかかる道路の両側に2、3階建ての新築の家が並ぶ。新婚の飾りを付けた車とすれ違う。チャの話では、今走っているロンビエン区では、土地の価格が5,000VN ドン/m²から5,000,000 VN ドン/m²に急上昇し、土地を売って得た金で家を新築すること。越南では土地の所有権は国にあるが、先述のように、ドイモイに伴う市場経済制度導入とそれを支えるための土地政策の変更により、農民に土地の交換、委託、賃貸、相続、担保の権利が与えられ、土地の私有制が実質的に強化される。そのことが経済を活性化させる一方で、土地成金を生み出し、土地の寡占を加速しているのであろう。

木工の村 Dong Ky

車はいつの間にかズオン（Duong）川（紅河の支流の一つで、ハノイ市の上流で紅河から分かれる）の右岸の自然堤防上を走っており、ズオン川に架かるズオン橋を渡り、午後2時ちょうどにイエンヴィエン町（Yen Vien township）に入る。車は更に走り、2時5分頃バクニン省に入り、12分にツソン（Tu Son）の

町、15分にドンキィに入る。前回訪問の2001年9月から、旧街の手前に新街ができており、4階建ての、間口が狭く奥行き長い新築されたばかりの建物が、間口を連ねて並び、一つの集合建造物を形成する。それら集合建造物が、主道に沿ってあるいは主道から入る側道沿いに幾つも見える。これらはいずれも木工家具を扱う店であり、ドンキィの装飾木工家具の需要がそれだけ大きいことを意味しているのであろう。チャの話では、ハノイ農業大学で主要なポストに就いている教官も、ドンキィの木工家具を家に置いているとのこと。ドンキィの家具は大きく、日本の一般的な家庭ならば部屋を占有してしまい、人の居る場所が無くなってしまっだろう。

新街を過ぎて旧街に至り、2時24分車を降りる。旧街は2ないし3階建ての建物で、やや年数の経った建物が軒を並べる（図48）。通りに沿った店に一軒一軒入りながら、豪華で立派で重そうな家具を見て回る。ドンキィの装飾木工家具は、それを丹念に磨くことによって黒い光沢を出すと推測され、そのためか、店の前であるいは奥で、裏で、口にマスクをした女性が家具をあるいはその部品を一心に磨いている。磨いているのは全て女性、彼女らの日当は果たしてどれくらいだろうか。一軒の家具店（図49）では、並べられた装飾木工家具に老女が座って一人店番をする。店の奥にはベッド（木製）が置いてあり、その上に神棚が祀られる。奥の部屋には磨きかけの家具が雑然と置かれ、部屋の外の三和土では3人の女性が家具を磨いていた（図50）。店に戻り、案内されて階段を登っていくと、中2階では、若い男がハンモックに腰をかけて乳児に哺乳瓶からミルクを飲ませていた。2階はやや煤けた感じで、売物用の家具と生活用の2つのベッドが置かれ、一つのベッドには蚊帳が吊られていた。仕事と生活の共存を思い、住み込みで働く人の寝場所の確保と防犯の意味もあるのであろう。通りの反対側は貯木場になっている。別の店では、女性が3人カードゲームをしながら店番をしていた。客が来ると1人がその場を離れ、済むとまたゲームに戻る。鶏の寄木細工（中が小物入れになっている）を50,000VN ドン、別の店で雄鶏の木彫りの置物を100,000VN ドンで購入する。雄鶏の木彫りの置物、チャが値引き交渉を試みたが、相手の中年女性のしたたかさとパワーが上で、結局無駄であった。3時43分やや見疲れてドンキィを後にする。

ノイバイ空港へ

ノイバイ空港へ向かう。いよいよ最後のコースである。ザーラム県イエンスオン (Yen Thuong) 社にさしかかる。ここは畑作地帯 (図51, 52) で、1年中畑作物が栽培され、稲作は行われない。16日の国立土壤肥料研究所ヒエン所長の説明にあった年間1,000kg/ha 近い肥料が施用される所かもしれない。ドンアン (Dong Anh) 県に入る。土地利用は、イエンスオン社の畑作専作から、稲作と畑作の共存、稲作 (水田) 主体へと移り変わる。広い養魚場が見え、一つの池ではアヒルが飼われていた。道路の端にユーカリが見える。4時30分ドンアン県のセンターへ入り、40分フーロー (Phu Lo) に至る。ここまでの間、車から見える農家は2, 3階建ての建物が大部分で、紅河デルタの伝統的な赤瓦の平屋の農家はわずかに残っている程度だった。

4時45分一軒の食堂に入り、ブンマンを食す。夕食にはまだ早い時刻のためか、店の客は我々だけだった。隣のテーブルでは、若い女性がテレビを見ながらニンニクの皮を剥いていた。先ず、アヒルの一種の茹でた

肉を食べ、ブンマンを食す。マンはタケノコ (bamboo shoot) を意味し、ブンマンはタケノコ入り米の細麺。今回のハノイ紀行、ヤギ料理に始まりブンマンに終わる。食べ終わって、チャからフォー (Pho) とブン (Bun) の違いについて聞く。フォーとブンはどちらも米の粉から作るが、その製法が異なる。

フォー：米を粉に挽いて後直ちに茹で (boiling)、広げて乾かさずに麺に切る。湿った状態 (wet condition) に保ち、1～2日以内に食す。

ブン：米を粉に挽いて1～2日間放置して茹でる。茹でた後押出機で押出して麺にし、冷水で冷やす。1日以内に食す。

米の細麺は全てフォーと思っていたが、越南食文化の奥の深さを思い知らされる。

5時30分に食堂を出て、40分にノイバイ空港に到着、ハノイ紀行も終幕が近づく。空港には、ハイ君の奥さんのブイ・ティ・フォン・ロアン (Bui Thi Phuong Loan) さんも見送りに来てくれる。ロアンさんは国立土壤肥料研究所で働くが、同時にヴィエトナム農業科学大学 (Vietnam Agricultural Science Institute: VASI) の修士課程の学生でもあり、16日の国立土壤



図49 Dong Ky, 家具店, 装飾木工家具.



図50 Dong Ky, 家具店, 家具磨き.

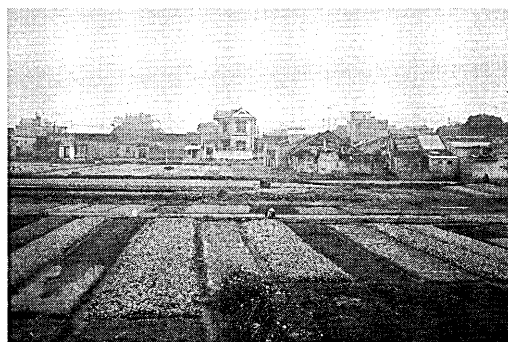


図51 Gia Lam 県 Yen Thuong 社, 畑作地帯 (1).

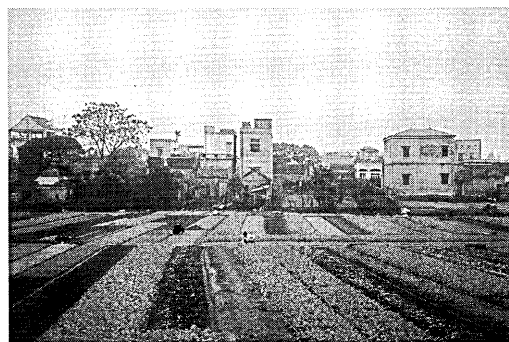


図52 Gia Lam 県 Yen Thuong 社, 畑作地帯 (2).

肥料研究所訪問の時は、修士課程の学生をしていて研究所にはいず、会っていなかった。搭乗手続きが始まるまで、久保さんは立って専らハイ君と、私は椅子に腰掛けてチャ、ロアンさんと話す。6時30分からの予定が少し遅れて搭乗手続きが始まり、出国審査を済ませて、チャ、ハイ君、ロアンさんと何度も手を振って別れを惜しみ、手荷物検査を受けて、6時50分待合室に入る。変わりいく紅河デルタ、女性のリーダーが、中央にも地方にも、大学・研究所にもまた社会にも、すぐにも現れるだろうことを想像しながら。

文 献

- 江頭和彦・緒方一夫 2000 「ハノイ農業大学強化計画」について. 日本土壤肥科学雑誌, 71: 575-580
 国際協力事業団農業開発協力部 2003 ベトナム社会主義共和国ハノイ農業大学強化計画終了時評価報告書. 国際協力事業団, 東京
 黒澤 靖・江頭和彦 2003 ヴィエトナム紅河デルタ農村における水質調査の方法と実際. 日本土壤肥科学雑誌, 74: 551-556
 吉田よし子・菊池裕子 2001 東南アジア市場図鑑 [植物篇]. 弘文堂, 東京

Summary

We visited Ha Noi, Viet Nam during March 13 and 20, 2005. The main purpose of the visit was to discuss the detail of the joint symposium with Hanoi Agricultural University (HAU). We have discussed with authorities of the Faculties of Land Resources and Environment and of Agronomy of HAU and agreed with them on the symposium theme, schedule, oral and poster presentations, publication of papers, and excursion to Son La province before the presentation.

Another purpose was to monitor worsening of the quality of surface and ground water, caused by agricultural practices such as over-application of chemical fertilizers to fields, around Ha Noi city. We have continued to monitor the water quality at three communes in the northern to western area around Ha Noi city since October 2002. This time we selected a commune in the southern area around Ha Noi city with help of counterparts of the Faculty of Land Resources and Environment of HAU. We measured pH and ORP of water at the sampling sites, and concentrations of nitrate and ammonium ions of the water samples were determined by staffs of the Central Laboratory of the Faculty of Land Resources and Environment of HAU.

In addition to those two purposes, we visited the Institute of Fruits and Vegetables and the National Institute for Soils and Fertilizers under Ministry of Agriculture and Rural Development to get related information through discussion with Department Head or Director of the institutes and to understand the current research activities in the related fields. We also visited a private seed company to know the situation of distribution of vegetables seeds in the Red River delta.

Agricultural environment in the Red River delta, especially near or around Ha Noi city, has quickly changed along with development in the market-oriented economy. Establishment of management practices for sustainable agricultural ecosystem is an urgent research work in the agricultural field, and that is a theme for the joint symposium with HAU which will be held on December 2005.